

資 料

終戦前滞日ドイツ人の体験 (5)

——「終戦前滞日ドイツ人メモワール聞き取り調査」——

荒 井 訓

戦時下の日本に暮らしていたドイツ人の多くは、終戦の2年後、1947年の2月と8月にアメリカ軍の部隊輸送船で本国に送還された。当時日本にはどれくらいのドイツ人がいたのだろうか。ドイツ大使館に勤務していたガリンスキー氏は次のように証言している。

「反ナチだったことを証明できたドイツ人や、たとえばユダヤ人でナチの迫害を受けていたドイツ人が日本に残りました。さらに、宣教師や修道女、そして、血縁関係で日本と結びつきが強い人々も残りました。全体的に見て、終戦のときに日本にいた約3000人のドイツ人のうちおよそ700から800人が日本にとどまったと考えられます」¹

約3000という数のドイツ人が日本で暮らした理由や経緯は当然ながら多様である。日本にそれぞれの関心をもって自ら望んでやって来た人々もいれば、戦時下の暗雲について逃げるように日本を目指した人々、あるいは気まぐれな運命に振り回されて自分の意志とは無関係に言わば日本に不時着した人々もいる。たとえば、キューバで貿易に携わっていたヤンセン氏は1941年夏、迫る危険を避けて日本経由でドイツに帰るつもりだったが、帰路が断たれたため日本に

1 『文化論集第16号』147頁

留まることになり、高校で教師になったのだった。²

教師、留学生、研究者、ビジネスマン、外交官、宣教師。彼らは、来日の理由や経緯はさまざまであるにしろ、日本とドイツが交流をはじめて以来現在に至るまで平時でも日本で暮らしていた人々である。しかしその約3000人のなかには、とりわけ戦争に翻弄され、平時なら日本社会に入り込むはずもなかった人々もいる。ナチスに反発して日本にやって来て真珠取引で成功したフォル氏の証言を引いてみよう。

「当時、私の知るところでは、3200人以上のドイツ人が日本にいました。その多くは日本に定住していたのではなく、船を失ったドイツ海軍の兵隊たちでした。箱根には、空き家になっていたサマーハウスがたくさんあり、これをドイツ人が借り受けました。仙石原地区にはふたつの大きなドイツ人のグループが住みつきました。ひとつのグループは水兵たちで、もうひとつは、ドイツがオランダと戦争を始めたときにオランダ領インド（インドネシア）から日本に船で運ばれてきたバタビア婦人のグループでした」³

水兵たちと「バタビア婦人」、すなわち本調査で記録された証言の多くに登場する「蘭印婦人」が約3000人のうちの大きなグループをなしていたという。

『文化論集』第15, 16, 17, 20号には、それぞれ学者、外交官、ビジネスマン、教師というグループ別に証言を採録してきたが、連載の最後になる今号に載せるのは、そのようなグループの代表ではない人々の証言である。

水兵の一人だったマンスフェルト氏、「蘭印婦人」の一人だったヴロツィーナ夫人の話は、大きなグループを構成していた当人の証言であり、当時の滞日ドイツ人の状況を知る上で欠くことのできないものである。

外国での職務を携えた駐在武官でも職業軍人でもなく、偶然1943年3月から

2 『文化論集第20号』94—109頁

3 『文化論集第17号』138頁

1947年2月まで日本に留まることになる一兵卒だったマンスフェルト氏の話からは、言わば低い視線から見た水兵たちの生活が浮かんでくる。

1941年の1月から2年半にわたって東京のドイツ大使館に勤務していたコルト夫人⁴もオランダ領インドからの「蘭印婦人」ではあったが、もともと在外公館で働いていたコルト夫人とは違って、パン作りのマイスターの娘だったヴロツィーナ夫人は数奇な運命に運ばれてドイツから日本に漂流して来た女性である。

この二人のほか、1937年からNHKの短波放送のアナウンサーとして勤務し、終戦の放送も担当したグライル氏、教師として赴任する父親に連れられて3歳で水戸に来て30年余りを日本で過ごしたバイアー夫人、やはり教師として赴任する夫とともに来日し、松本および横浜で主婦として母として当時の日本を記憶にとどめたツァッヘルト夫人の証言を以下に採録する。特殊な境遇にあった彼らの証言は興味深い情報に満ちている。

1. フリッツ・マンスフェルト氏の体験

Dipl. Ing. (工学士) Fritz Mansfeldt: 1920年8月12日、エッケルンフェルデ郡オルヌム生まれ。1943年3月から1947年2月まで、仮装巡洋艦「ミヒエル」、貨物船「ハーフェルラント」および潜水艦「UIT-24」の海軍兵として芦之湯（箱根）、鎌倉および神戸に滞在。1947年2月、アメリカの部隊輸送船「マリン・ジャンパー」で本国送還。ケルンのフォード社の技師として働く。1991年9～10月に日本再訪。芦之湯、東京、横浜および鎌倉に滞在。

1939年9月に私は、1年後には家に帰れると考え一兵役は2年で、戦争の

4 コルト夫人の証言は、外交官グループの証言をまとめた『文化論集第16号』に掲載（175—179頁）。

年は倍にして数えらたからです—、志願して軍隊に入りました。しかし、現実にはまったく違いました。8年間を兵隊として過ごし、そのうち日本に丸4年—戦中2年、戦後2年—いることになりました。

私が日本に来たのは、仮装巡洋艦「ミヒエル」の乗務と関係があります。「ミヒエル」はナンバー28をつけ、南大西洋、インド洋、さらに日本に停泊のち太平洋を航海しました。

あの頃、1942年11月30日に私たちの艦の姉妹艦「トーア」(仮装巡洋艦ナンバー10)が横浜で爆発しました。不注意によるのかサボタージュによるのか不明のままでした。私たちの任務は本当は1942年の終わりに完了し、船のオーバーホールのためにしばらく母港に停泊することになっていました。しかし、ビスケー湾(フランスとスペインの間にある大西洋の湾入)を抜けて母港へ寄港する見込みがなかったため、指令は「極東へ航行」でした。

船に乗っていた多くの人間に、目的地の公表は落胆と驚きを引き起こしました。私は、それを非常に喜んだ一人でした。私は若く、艦上で3番目に若かったと思います。当時は、新しいものへの憧れが、ドイツへ帰るという願望よりも強く私の心を捉えたのです。私の母が戦前に日本のことを夢中になって話していたのを覚えています。「今はお前一人が日本へ行くが、いずれお前の母親を連れてきてこの地を見せてやるんだぞ」と自分に言い聞かせました。残念ながらそれは実現しませんでした。

さて、われわれの船は再び南方への航路を取り、喜望峰を回って、マダガスカル、モーリシャス、クリスマス島を通過し、ジャワ海のバリ島とロンボク島の間を抜け、まずバタビア(現在のジャカルタ)のタンジョンプリオク港に着き、そこで日本海軍に迎えられ、盛大なもてなしを受けました。ここに1週間停泊している間に、私たちは日本軍が拘束したオランダ人たちの収容所を見ま

した。ここから、敵との遭遇を避けるためにいつものように光を遮蔽して、1942年2月19日にシンガポール経由で—シンガポールでは日本のためにできるだけ多くの石油を積みました—北へ向かいました。

艦長のヘルムート・フォン・ルックテシエルは、すでに第1次世界大戦で潜水艦の艦長として武勲をあげた人気のある将校でした。彼は1942年に海軍大佐に昇進しました。予備役将校で仮装巡洋艦艦長としてはたいへんな榮譽です。

1943年2月27日に私たちはフォルモサ（台湾）と沖縄を通過しました。瀬戸内海に入り、門司と下関の街を見ました。それが、私が初めて見た日本でした。春で、心地よい季節でした。

神戸に3月2日午前に到着し、私たちは待ち望んでいた上陸を果たしました。私たちは沖合に停泊し、小さなボートで陸に上がりました。1942年3月3日の、神戸の大きなドイツ人コミュニティとドイツクラブとの出会いは刺激的でした。初めて街に出たときのことを私はありありと覚えています。私たちは元町と盛り場をぶらつきました。事あるごとに聞いた日本の海軍マーチはとくに私を魅了しました。それは現在ドイツでハノーファー見本市のときによく聞かれます。日本人の客がビール・テントでバイエルンのブラスバンドの指揮を許されるとこれをやるのです。

日本という国と日本人を知るために、たとえば琵琶湖などへ遠足がよく行われました。私は「ミヒエル」の2番目のグループで、エレガントな琵琶湖ホテルの前で記念写真を撮りました。この遠足に同行した最高位の将校は海軍中尉のシュモリングでした。とても可愛い、親切的な日本女性たちが接待をしてくれましたが、残念ながら通訳のフリドリッヒ・ティール以外は誰も彼女たちと話ができませんでした。彼は、イエズス会の神父で、兵役代替社会奉仕勤務としてすでに長く日本で暮らしていました。

女性たちの着物は本当に目の保養になりました。ズボンのように見えるモンペと呼ばれていたのだけは嫌な感じでした。宝塚へも一度招かれました。六甲山から見た海の眺めはみごとでした。しかし、私にとってもっとも印象的だったのは、一番長く駐屯した箱根山中の生活でした。箱根での私の生活の中心は、温泉の上に立てられたホテル（旅館）、松坂屋でした。このホテルは日本海軍との松坂家の個人的関係を通してドイツ兵に提供されていました。私たちはこのホテルをほぼ独占していました。というのは、戦争のためにほとんど客がいなかったからです。

私の日本滞在はほとんど休暇のようでした。別の言い方をすると、私はこの駐屯をプレゼントのように感じていました。不愉快なことは忘れてしまいました。ドイツ人家庭との密な関係を私は求めませんでした。私は23, 24歳でしたから、むしろ、きれいな日本女性を見たときに、私の心は高鳴りました。戦後うまい商売をしてそこそこ豊かになり、私は小さな家を借りることができ、そこに日本人のガールフレンドと一緒に住みました。

私が裕福になったのには、ハインツ・W・ヴェントというドイツ人のジャーナリストが少し関係しています。彼は「ドイツ・ニュース社」に記事を書いていました。ちなみに彼は日本女性と結婚していました。彼女はカトウ・ヤスコという名前で、現在87歳の未亡人としてハンブルクに住んでいます。私自身はタバコを吸わなかったので、手に入った煙草をすべて交換したり現金化したりできました。私は、ヴェントからその代わりに靴や背広やその他の必需品を受け取りました。

残念ながら私は日本語をちゃんと勉強しませんでした。愚かなことに、日本滞在は、戦争と同様すぐに終わるだろうと考えていたからです。しかし、あまり熱心ではなかったけれどもそれなりに勉強した証拠を私は今でももっています。『いかにして日本語を学べるか』とか、日本の鉄道省が出版した魅力的な

装丁の『美しい日本』がそれです。

もちろん、私は軍務を果たしていました。現在の目から見ればまったく軍隊の仕事には見えませんが…。1943年5月からその年末まで私は「ハーフェルラント」に配属されていました。この船は、イー・ゲー・ファルベン⁵の化学製品を運ぶ商船でした。私は、船大工ともっとも親しくなりました。彼は日本人のガールフレンドがいたからというだけではありませんが、よく日本を知っていました。ロイスナー艦長の指揮下にあり、上海へ派遣されたこの船は高射砲を備えていました。それを扱うために私が配属されたのです。それで私はあらためて瀬戸内海を通り、上海でワクワクするような3週間を過ごしました。24時間の歩哨、48時間の上陸休暇でした。私は、グレート・ウエスタン・ロードのカイザー・ヴィルヘルム・ギムナジウムの校長だったヴァルター・ゲーゲル博士宅に招かれました。積荷は陸揚げされました。私の記憶の限りでは、日本の占領軍が街中で支配者のように振舞っていました。市電の乗客は日本の軍人の前では立ち上がらなければなりませんでしたし、黄浦にかかるガーデン・ブリッジの上にいる日本軍の歩哨の前では深々とお辞儀をしなければなりませんでした。そしてこの上海では、1943年10月にドイツから逃げてきて上海に新しい滞在地を見つけた、数え切れないほどのユダヤ人の悲劇に遭遇しました。私は、日本人街区の通りに設置された柵と、私がはじめて「ゲッター」ということばを聞いたことを覚えています。

戦争中なのだと私がはっきり感じたのは、1943年のクリスマスイブの2日前、12月22日でした。「ハーフェルラント」は南方への新たな航海に出ました。私たちは、10隻ほどの日本船に伴走されて和歌山の海岸沿いに進みまし

5 IG Farben=Interessengemeinschaft der Farbenindustrie AG: ドイツ最大の化学工業コンツェルン。1925年創立、第2次大戦後に解体

た。昼どきに私たちは最初の魚雷の攻撃を受け、3隻か4隻の日本の船が破壊されました。そして晩には、魚雷が私たちの船をとらえました。アメリカ軍の魚雷が私たちの船に命中したとき、私は20時の歩哨勤務からもどり、シャワーを浴びていました。私は、帽子以外は何ももたずに、パジャマ姿で上まで駆け上がりました。帽子をもったのはきっと自尊心からです。数名の乗組員はボートに乗り込みました。しかし、船は横傾斜し、機械室に浸水があったものの沈まなかったため、日本のタグボートに引かれて神戸に着くまで私は甲板にいました。1944年1月3日に私のこの船内勤務は終わり、私は箱根に帰りました。この「旧ハーフェルラント」（1921年建造）が再び修復されることはありませんでした。この船は浮かぶ倉庫として使われ、1945年9月にあった台風にさらわれ、浜に打ち上げられ、1946年1月に解体されました。

1944年の夏、私は、広島市の南25キロのところにある呉に配属されました。私は、三井造船所近くの素晴らしいホテルに住みました。そこは南洋の島にでもいるような感じがしました。それほど辺りの景色は印象的でした。私には潜水艦の勤務が予定されていました。それもイタリアの潜水艦 UIT24 で、姉妹艦 UIT23 と UIT25 が一緒でしたが、これらの船はイタリアが同盟を離脱したあとドイツの手中にありました。私はこの「怪物」のなかで夜を過ごさなければならなかったとき、はるかに誘惑的なホテルを思い浮かべて「病氣」になってしまいました。私は人生で今だかつてないほど完璧に「病氣」になってしまったので、神戸のドイツ人用の病院に送られました。私は、転地すると、患者になったときと同様すぐさま健康になりました。潜水艦でのつらい勤務を耐えなければならなかったドイツ兵たちのことを思うと頭が下がります。この事件のあとにはまた箱根山中の芦ノ湖での快適な勤務の日々が続きました。

1944年8月から1945年4月まで私は鎌倉に配属されました。私が当時比類の

ないほど素晴らしいと感じ、今もそう思っている日々が新たに始まりました。東京のドイツ大使館はかなり増員されていました。とりわけ封鎖破り船により、前より多くの無線通信士がやってきました。独ソ戦の前にはシベリア経由でも来ました。東京の既存の建物には彼らを収めきれなくなりました。そこで不足分の部屋を探し回り、さらに別の建物を探し回り、鎌倉の優雅な海浜ホテルに部屋が見つかりました。ここに海軍武官、ヴェネツカー提督の司令部も置かれました。彼自身と彼の秘書は東京のオット大使のもとにとどまりました。私たちは、日本では個人的に会うことはありませんでしたが、彼の秘書のインゲボルク・クラークさんと私は1960年にケルンの市電のなかで偶然会いました。彼女はケルンで、私と同様、フォード社で働いていたのです。海軍武官の司令部には、多く民間人、戦争のために職を失った在日ドイツ人やほかの国にいたドイツ人たちが働いていました。私は記録保管室に配属され、GKDOS（極秘指令）担当官でした。

鎌倉は高級な所で、多くの上流階級の日本人や、あらゆる国々の名士たちが多数住んでいました。鎌倉には、私にとって日本で唯一のドイツ人女性の友人、ベルンストルフ伯爵夫人がいましたが、付き合いは長くは続きませんでした。

時々訓練も受け、命令を下すこともありました。私は政治に直接接することはありませんでした。あそこにはNSDAP（国家社会主義ドイツ労働者党）の現地グループリーダーがいました。彼はフランツ＝ヨーゼフ・シュパーンといいました。関連する催しを今ではもう覚えていません。私ができる限りそれを避けていたことは確かです。私たち兵隊にとって実に不快だったのは、ヒトラー暗殺未遂事件のあと、もはや通常の軍隊の敬礼（手を帽子に）を許されなくなったということです。それ以降、ドイツ式敬礼（右手を高く挙げるナチ式敬礼）をするよう命令されたのです。これは日本の制服組にはとくに滑稽な印象を与えました。いかにも奇異で不快でした。

私は、私たちの歩哨班の班長、ヘルムート・クンツェと悶着を起こしたことがありました。私は夜に芦之湯営舎の歩哨の任務についていました。そのほかに軍の任務はほとんどありませんでした。早朝の最初の仕事として私たちは、コーヒーが時間どおり朝食にいれられるように、5時頃厨房で火をおこさなければなりませんでした。しかし、夜には時間がたくさんあり、無線通信士が素晴らしいラジオをもっていました。ハンブルクの港湾労働者で共産主義者だったクルト・ヴィヒェルトと一緒に、私はサンフランシスコ放送を聴いていました。私たちは日本でいつもサンフランシスコ放送を聴いていたのです。ほかの放送局がこれほどよく受信できなかったからです。ドイツの放送番組を私たちは熟知していて、サンフランシスコの放送局については、この放送局が敵側のニュースを放送することを知っていました。ラジオから得た情報をもらすという不注意が、あやうく私の命取りになるところでした。そういうことを繰り返したときに、歩哨班の班長が「軍法会議にかけて死刑だ」と私たちを脅したのです。

幸いまだ私の首はつながっています。日本で軍務についている間に、私は上等兵曹に昇進しました。それは下士官で、たいして影響力のある地位ではありません。しかし、私は、日本の外務省が私に公布した身分証明書を非常に誇らしく思っています。この証明書には、1944年10月6日付で私がドイツ大使館の館員であると記載されています。この証明書は私にはたいへんメリットがあり、とりわけ、不足していてそれがなければ入手しにくいような品物の買い物のときに便利でした。ワイシャツさえ仕立てさせることができました。

戦争末期には、多くのものが、とりわけ空襲のために、乏しくなりました。品物は、とくに食料ですが、配給になりました。必要な物資は配給切符でだけ手に入りました。この切符は慎重に扱わなくてはなりませんでした。私たちドイツ人は、この切符を日本人と同じように受け取りました。しかし、私たちド

イツ人の方がもっと良かったのです。横浜で爆発した「トーア」や、私が日本まで乗ってきた「ミヒエル」は連合国の通商を妨害する役目をもった仮装巡洋艦で、敵の商船を捕獲あるいは沈めました。捕獲船「ナンキン」が横浜につながれ、その積荷が私たちに提供されました。この「ナンキン」は、後に「ロイテン」と改名されましたが、私たちにコンビーフ、ビーフ・ソーセージ、輪切りのパイナップルやオレンジ・マーマレードなどを味わわせてくれました。甘いコンデンスミルクを使ってフライパンでクリームボンボンを作りました。パイナップルは焼いたり煮たりして、あらゆる食べ方をしました。コンビーフはパジャマに入れておいて朝昼晩に食べました。そして、米は日本人から手に入れました。私は当時23歳でしたが、それまで一度も米の飯もパイナップルも食べたことはありませんでした。その後、私の一番の好物は、米、刺身、麒麟麦酒になりました。私は贅沢に暮らしていました。私の印象では、私たちはとにかく優遇されていました。日本人は私たちを大事に扱ってくれましたが、日本人の窮状を見なかったということはありません。至るところで困窮に出会いました。たとえば、私は、横浜・神戸間あるいは東京・神戸間の急使にも指名され、急使のための特別車両に乗って10回くらいこの区間を列車で走りました。何度もこの行程は中断されました。岐阜、静岡、名古屋など途中の町が爆撃を受けて燃え、そうすると列車が町の手前で止まったからです。私たちは全員列車から降り、地べたに伏せなければなりませんでした。そういうことをたびたび経験しました。それが生々しく感じた戦争でした。

沖縄が4発（エンジン）の大きな爆撃機B29の基地になったあと、しばしば空襲警報が鳴りました。1945年6月5日に私は神戸空襲を経験しました。私は、海軍少佐、アイテル・フリードリヒ・ケルントラートのところに配属されていました。彼は神戸の海軍基地の指揮官でした。この将校が、外交官のステータスを得た最後のドイツ人でした。6月5日の朝6時、サイレンが鳴り、

神戸への全面的攻撃が始まりました。それが午前中ずっと続きました。私は、町の背後の、海を見渡せる山の中腹に住んでいました。ここで私は、飛行中隊が次々と組織的に爆弾を投下するのを見ました。不運にも西風が手伝って、神戸は燃え始めました。黄燐焼夷弾が港の建物や施設にパラパラと当たる様子は恐ろしいものでした。私たちは全員、火の地獄から抜け出るため山に逃げこみました。私は山頂まで駆け上がりました。午後戻ってきたとき、私たちの家はまだ建っていました。私たち「臆病な」兵隊は恐れをなして逃げたわけですが、日本人の年配の料理人—オバサン—は残って火と戦い、家を救ったのです。数千人—公式発表では6,789人—が、この日神戸で命を失いました。

職務で頻繁に鎌倉・東京間を往復したので、私はよく横浜と大森にも行きました。大森では、ドイツ学園の先生をしていたハンス・フライシュハオアーと付き合いがありました。彼は独身で、日本人の家政婦に世話をしてもらって、私が出入りできる小さな家に住んでいました。私は当時、遅ればせながら高校卒業資格試験を受けたかったのですが、転属が多く実現しませんでした。当然フライシュハオアーの家では政治の話題が多くなりました。私が日本にいる間、彼との付き合いが、唯一の同胞との親密な付き合いでした。

1945年5月8日のドイツの終戦が私たちの生活を変えることはほとんどありませんでした。この終戦を私は、とりわけ両親と兄弟のことを思い、圧迫というより解放と感じました。私たちはその後形式的には、まだ連合国と戦っていた日本に抑留されることになりました。しかし、実際は抑留されているとはまったく気づかないほどでした。

それよりはるかに劇的に私の心を動かしたのは日本の終戦でした。おまけに8月15日は私の誕生日なのです。この日私は箱根の芦之湯にいました。経緯については、当時の私はごくわずかしかりませんでした。私はただホッと

し、また喜びもしました。私たちは、広島と長崎への原爆投下がどれほど恐ろしかったか、ありありと思い浮かべることができました。というのは、私たちは後に箱根の温泉で、広島と長崎の地獄から逃れ、箱根で心身の癒しを求める多くの人々に出会ったからです。

1945年8月15日は、私の心に刻み込まれました。天皇がこの日ラジオで語りました。「無条件降伏!」。聴いていた人々は深く心を動かされ、頭を垂れました。そして、9月1日に、東京湾に停泊していた戦艦「ミズーリ」の上で停戦協定が調印されました。日本は降伏し、戦勝国アメリカによる占領が始まりました。私たちの、日本によるいわゆる収容は、アメリカ軍による、やはり同様にとくに辛いこともない抑留に変わりました。

11月中旬、私たちの山に最初の連合国の人間が現れました。フランスのジープに出会ったのを覚えています。いずれにせよ連合国側は、私たちを計画的に調べ上げ、登録し始めました。アメリカ軍の将校の一人はフランクフルト生まれで、フックスという名前でした。しかし、こうしたことすべては私にとって大したことではありませんでした。私たちは、それも、東京から裕福な人々が週末にやって来る最高級な場所のひとつに住んでいたのです。後には、もちろんアメリカ占領軍の連中がここに来ました。

この時期のエピソードとして、こんなことを覚えています。GIたちが侵略者然としてジープに乗って来て、日本人の「お嬢さん」たちと一緒に、周辺の宮ノ下、強羅、小涌谷などホテルに宿泊しました。日本の習慣にしたがって、彼らの部屋の前には小さな下駄とピカピカに磨かれた茶色の男物の短靴がきちんと揃えて置いてありました。この靴を私はとても気に入り、これと、魚の皮できていて魚の臭いが強かった私の日本製の靴をさっさと取り替えてしまいました。前の持ち主には許していただきましょう。

ドイツには将来の仕事について何の期待ももてませんでした。そのため私は、カッセル出身の戦友、ルートヴィヒ・フッヘルトと一緒にオーストラリアに移住しようとしてしました。適格性試験には合格しましたが、法的な規定、つまり私の軍人という身分が移住の妨げになりました。移住に関する申請書は、公式に除隊して、ドイツから出さなければならないということでした。

それで私たちは、箱根の私たちの美しい宿、松坂屋にとどまりました。このホテルは今でも当時と同じ家族のもので、私はこの家族をほぼ50年後の1991年に訪ねることができました⁶。庭の門も屋外の施設も建物も、モダンになることなく昔のかたちのままあります。庭には今も私たちの戦友、テオ・ツューラーの墓石が残っています。彼はニュルンベルク出身の下士官で、姿の良いブロンドの男でしたが、アルコール中毒で死んでしまいました。彼の墓石に刻まれている死亡年月日は、1945年10月10日です。戦争はすでに過去のことでなっていました。

1947年2月のはじめ、別れのときが来ました。アメリカ軍芦之湯収容所の所長になっていたドイツ海軍中佐、トーマス・ブロームフィールドは、私を実際よりもよく見せるような品行証明書を発行しました。ハラという名前の日本人医師が最終的な健康診断をしました。横須賀から出航したアメリカの部隊輸送船「マリン・ジャンパー」には1157名のドイツ人が乗せられていましたが、その半数は女性と子どもたちでした。船尾から私は、日本人のガールフレンドと富士山に、彼らが見えなくなるまで長く別れを告げていました。上海でさらに55名の男性と32名の女性と子どもたちが乗船しました。そこから先の帰路、シンガポールを通過し、コロンボにちょっと停泊し、スエズ運河を抜け、最後に

6 当時の松坂屋に滞在していた水兵たちの世話をし、戦後も彼らと親交を続けていた松坂進氏は2000年暮に逝去された。

アレクサンドリアに停泊したあと、私たちはジブラルタル海峡を通過し、1ヶ月の航海を終えてブレーマーハーフェンに到着しました。このとき本国送還された人間のなかには、日本でナチのリーダーだったフランツ＝ヨーゼフ・シュパーンもいました。非ナチ化を目的とした、シュトゥットガルト近くのルートヴィヒスブルク集合収容所への送致は、ちょっとした幕間劇となりました。1947年3月27日に私は正式に除隊しました。

シュレスヴィヒ＝ホルシュタインの両親のもとへ向かう旅でヴェント夫妻が私の道連れになりました。彼らは、気の毒なことに、小さな息子をあの収容所で亡くしていました。ヨーロッパを離れて5年後の復活祭の火曜日に、私は両親と再会しました。両親の3人の息子たちが無事に帰ってきたのです。

私が戦争中に大きな幸運を得られたのは、とくに、立派な人間だった艦長、ヘルムート・ルックテシェルのおかげでした。彼は乗組員たちから、愛情を込めて「ルッキ」と呼ばれていました。彼は1940年の第21仮装巡洋艦「ヴィダー」と1942—43年の第28仮装巡洋艦「ミヒェル」の航海で、私たちの舵をとって無事に7つの海すべてを渡らせ、最後に1943年3月、無事に神戸港へと導いてくれました。

東京で彼は天皇に謁見し、日本の勲章を受けました。健康上の理由から彼は、グンプリヒ海軍大佐に私たちの船を譲りました。辛い決断でした。この船は南米西海岸への航海を成功させたあと、日本への帰路、本州の南方でアメリカの潜水艦「ターポン」に魚雷で撃沈されました。多くの死者が出ました。私はこの最後の航海には乗船していませんでした。

ヘルムート・ルックテシェルは東京と上海の病院に入院し、北京へ後療法に行きました。1946年7月に彼はブレーマーハーフェンに帰りました。彼は、イギリスにより第1次世界大戦以来「戦犯」の疑いをかけられていたので、長く収容所で過ごしたあと、1947年5月初旬、手錠をかけられて、彼の生まれたハ

ンブルクの未決拘留所に移されました。57歳になるまで10年間拘禁され、上告に7年かかりました。彼は釈放の2週間前に死にました。

有罪判決は、軍の将校により構成されたイギリスの軍事法廷で下されましたが、この法廷は仮装巡洋艦艦長の行動を理解することはできないものでした。

彼の部下たちは、この法廷が不当であったことを知っています。

考えてみれば、日本時代は私にとってたいへん素晴らしく、貴重で、心に刻み込まれるようなものでした。日本の土地も人も、いつも私の暖かい思い出の中に残りました。正直に言うと、思い出のなかでは、男性、とくに制服を着た男たちは、きれいな着物を着た魅力的な女性たちの陰に隠れてしまっています。大戦中私は本当に優遇されていたように思います。私は一度も負傷しませんでした。私は船ではいつもよい部署、たとえば、ブリッジの司令官デッキ上部の方位測定デッキに配属されました。私はこの戦争中一度も弾を撃ったことはありません。私がいなくても戦争ができたでしょう。私がいなくても戦争は同じ結果に終わったことでしょう。

*聞き取りは1995年7月20日にケルンで行われた。

2. アンナ・ヴロツィーナ夫人の体験

Anna Wrozyna (旧姓：バーレンジーフェン Balensiefen)：1908年8月25日、アイトルフ／ミュレンアッカー（ボン近郊）生まれ。パン作りのマイスターの娘だった彼女の結婚生活は始まりから普通ではなかった。オランダ領インド（インドネシア）在住のアルフォンス・ヴロツィーナは知人に渡された写真を見ただけで彼女を見初めて求婚した。1934年スマトラで結婚。1941年日本へ移住。1947年「ジェネラル・ブラック」に乗り本国送還。1970年夏、日本再訪。

私の「日本冒険」はまったく予期せず始まり、戦争に左右されました。私たちは辺鄙なインドネシアの金鉱で暮らしていました。鉱山はスマトラにありました。1940年5月10日、オランダも戦争に巻き込まれました。私たちが昼食を取っていると、ラジオからオランダ人の総督が、ドイツがオランダに侵攻したため、ここオランダ領インドでは全ドイツ人は収容される—オランダ人により！—、と話すのが聞こえてきました。まずドイツ人の男たちが連れて行かれました。女たちはなお数日家に残り、その後同様に収容所に運ばれました。まず半年スマトラで。それから私たちは—1940年12月6日、ちょうど聖ニコラウスの祝日のことでしたが—ジャワ島の収容所に移らなければなりませんでした。

私たち女性と子供たちは合わせて1年間オランダの収容所で過ごしたあと、ドイツ政府が日本政府との取り決めで、国際赤十字の指導監督下でドイツ人の女性と子供たちを収容所から連れ出し、日本経由でシベリアを渡りドイツへ帰国させることになったと聞きました。ドイツ側でも、日本が戦争に参入し、そうならば私たちがオランダの植民地にいるのはまずいということを予感していたのかもしれません。

1941年9月、私たちはバタビア⁷で日本の豪華客船「浅間丸」に迎えられ、日本へ船で旅立ちました。バタビアを出発し、私たちは中国あるいは日本で目的地を選ぶことができました。比較的大きな子供のいる女性たちは—その数合わせておよそ60人だったはずですが—、上海で船を降りました。子供たちがそのギムナジウムに通うことができたからです。約100人の女性と子供たちが長崎に残りました。私は神戸に決めました。バイアー社の仕事をしていた知り

7 インドネシアの首都ジャカルタのオランダ領時代の呼称。1602年からオランダ東インド会社の拠点となる。

合いのフォン・ロックシュトロー夫人が神戸にいたからです。それは私にとって最初の停泊となりました。さらに私たちは、オランダ領インドを去ることが許された唯一のドイツ人男性だった義父と一緒に船に乗っていたということもありました。肺結核の末期だった彼を神戸でドイツ人の開業医のところに入院させたのです。

日本に来た当初のことについては最良の思い出をもっています。とりあえず私たちは神戸ホテルに落ち着きました。ここで私はドイツ人の技師に招かれました。私の幼い娘が誕生日を迎えて3歳になったのですが、私たちは難民であり何もできなかったからです。彼のところを訪ねると、20歳の若い日本人男性がいました。私が知り合った最初の日本人です。ドイツ人技師のフックス氏は、彼を私に紹介しました。その若い男性はドイツ人の子どもを連れたドイツ人女性と知り合ったことをとても喜んでいました。彼はそれまで小さな子どもを連れたドイツ人女性に会ったことがありませんでした。会話はギクシャクしていました。彼はたどたどしい英語で話したのですが、私自身はほとんど英語が使えませんでした。私は日本語ができず、彼はドイツ語ができなかったのですが、それでも彼は感激して、この出会いの数日後にはドイツ語で手紙を書きました。その手紙を彼は苦勞して辞書をひきひき書いたのです。

私が今でも大事な思い出の品としてもっているその手紙は、Frau Wrozyyna（ヴロツィーナ様）という書き出しで始まっています。

“Frau Wrozyyna, bitte entschuldigen Sie, daß ich werde vielen Fehler in diese Brief machen, weil das ist der Anfang für mich auf deutschen Sprache zu schreiben. Die Freude übermannte mich so, daß ich gestern das Glück Zeit mit Ihnen durch Herrn Fuchs Vorstellung haben konnte. Aber ich bedauere meine schlechte Deutsch den guten Eindruck Ihnen nicht geben konnte. Es ist meine

grosse Freude, die gegenseitige Freundschaft fördern bei berühren mit Ihnen, wer vieles hervorragende Talente (Geist, Wissen, Technik, Vereinigung und so weiter) für mann unter alle Menschenrassen haben. Ich liebe und hochachte Ihres Vaterland und seiner nation von ganzem Herzen was in meinen Kräften steht. Darum ich werde sehr freuen, wenn ich Sie helfen kann und eine schöne Freundschaft zwischen Ihnen und mir machen. Ich fühle mit Ihnen in dieser Lage, daß Sie aus dem fernen Java gekommen sind, weil einer Mißhandlung gegen die Zapfen Lander vor ausweichen. Ich hoffe, unser Land den ewigen Frieden möglichst schnell sichern. Ich freue mich auf das Wiedersehen und mit Ihnen, nicht auf Englisch, sondern auf Deutsch mehr gut sprechen, wenn ich nach Kôbe nächstes Mal gehen. Bitte grüßen Sie Ihre Schwester und liebliches Kind. Mit vorzüglicher Hochachtung. Yoshiharu Nakajima”.

(＊意味不明な個所が多いが、およそ次のようなことが書かれている。「ドイツ語で書くのは初めてなので、この手紙に多くの間違いがあることをお許しください。昨日フックス氏のところであなたと知り合い、楽しいときを過ごすことができましたが、ドイツ語が下手なためにあなたに良い印象を与えられなかったことが残念です。あなたと知り合い嬉しく思っています。精神、知識、技術などに傑出した才能をもつあなたの国と国民を私は敬愛しています。ですから、あなたを助けることができ、あなたとの友情を育むことができれば光栄です。枢軸国の人間に対する虐待を逃れて遠くジャワ島からやって来られたあなたに同情します。私は、わが国が永遠の平和を早く築くよう希望しています。またあなたとお会いするのを楽しみにしています。次に神戸に行ったときには英語ではなく、もっと上手にドイツ語で話せるようにしたいと思います。妹さんとお子さんによろしく。敬具 ヨシハル・ナカジマ」)

この若い男性は枢軸 (Achse) の訳語に Zapfen (栓) という単語を選んでい

ます。彼は Achsenmächte（枢軸国）と言いたかったのでしょうか。彼が触れている妹というのは私の義妹です。子どもは心の柔軟さを失っていました。その子はもうすぐ60歳になり、私は90歳になります。当時とても若かったナカジマさんとの友情は現在まで続いています。彼が戦後ドイツに私を訪ねて来てくれたとき、彼には4人の子どもがいました。

話を日本のことにもどしましょう。シベリア経由でヨーロッパへ行くという計画は実現しませんでした。重い病気で神戸の病院に入院していた義父は翌年（1941年）の3月に亡くなりました。彼は神戸に埋葬され、盛大に葬儀が行われました。それについて書かれた新聞の切抜きを私は今でももっています。

1941年12月のはじめに日本と連合国との戦争が始まりました。ホテルで暮らすのは目に見えて難しくなりました。日々の食料ははっきり感じ取れるほど乏しくなっていました。ときどき私は子どもと義妹と一緒に必要な食事を求めて町を歩き回りました。その後、私たちがドイツクラブで昼食を取ることができるよう決められました。このクラブはドイツ人コミュニティーと神戸に住んでいる家族が共有する場でした。私たちの面倒を見てくれる援助委員会もできました。でも私はすぐに自立して、日本家屋を借りることができました。私たちの前にその家を借りていたドイツ人が使っていた家具をいくつか譲り受けました。そのために援助委員会が必要でした。援助委員会はこのような大掛かりな仕事を担当していました。しかし、私の場合はあまり積極的に動いてはくれませんでした。つまり、私には子どもが一人しかなく、何人か子どもがいる女性たちが優先されたというわけです。私は粘り強く、領事館に行って領事に時間をかけて頼み込み、その家を得たのです。ナカジマさんはその後召集されるまで2、3回訪ねて来ました。最後にやって来たときに彼は軍服を着ていました。その後、戦後になって彼がドイツの私たちを訪ねて来るまで、私は彼の

姿を見ることありませんでした。その小さな家を私は義妹と共同で借りていました。彼女は私と同じようにオランダ領インドから浅間丸で日本に来ました。彼女は子どもの頃からそこに住んでいました。家賃は領事館を通じて支払われました。

神戸では、領事館とドイツ人コミュニティのレセプションに始まり、日本人とのコンタクトまで私たちは本当に良いときを過ごしました。招待されたことも度々ありました。たとえば、大阪のある学校に招かれました。その学校では日本人の子どもたちが私たちのためにドイツの歌を歌ってくれました。京都や奈良には何度も行きました。全体として見れば、私たちは悪くない生活をするのができたのです。お手伝いさんまでいました。アマ⁸さんです。そのため私たちは、アマさんと話せるように日本語の初歩を習得しなければなりません。子供たちは速く学ぶものです。私の3歳の娘はすぐにものにしてしまいました。ドイツ人の子供たちは日本人の遊び友だちと日本語だけで会話していました。母親とだけ彼らはドイツ語で話したのです。しかし母親たちも、少なくとも見当がつけられる程度には日本語を勉強しなければなりませんでした。

私の娘が最初に通った学校は神戸のドイツ学園でした。独身女性のライナルト先生が教えていて、彼女にはのちにドイツで再会しました。ミールケという名前の男の先生もいました。彼は私たちの家の近くに住んでいました。しかし、何もかも長くは続きませんでした。神戸に最初の爆弾が落とされたときにドイツ学園も解散することになりました。学校の建物には海軍の兵隊が入りました。ですからドイツの学校の授業をする可能性はなくなってしまったので

8 東アジア諸国に住む外国人の家庭に雇われた現地人の女中や乳母の呼称 (amah, 阿媽)。ヴロツィーナ夫人はインドネシア時代の習慣でこう呼んでいたと思われる。

す。それで、まず私は娘をフランス学院に行かせました。その後この学院も立ち行かなくなると、しばらく自分で娘を教えたり、個人的にミールケ先生に教えてもらったりしました。

安全のために神戸の背後にある山へ引っ越しました。標高約1000メートルの六甲山の山腹に私たちの非難場所がありました。神戸の造船所のオーナーがそこにある空き家を借りて、高価な家具などの貴重品をそこに運び込んでいたのです。彼は私がこの家に住むことを喜んでくれました。私たちはしばらくこの山にいました。下の街よりも安全だったからです。

実際、こうして私たちは、街で荒れ狂った激しい爆撃から逃れたのです。私たちも爆撃機の爆音や生命の不安にさらされていました。しかし、飛行機の、死をもたらす積荷は下の街にだけ落とされました。ときおり高射砲が私たちの頭上を越えて空に打ち込まれました。当時私が感心し、その後も今まで頭を離れないのは、日本人が山に避難して来て町を見下ろし、彼らの家や町並みが火に包まれて瓦礫の山と化してしまったのが分かって、彼らが保っていた落ち着きでした。1軒の日本家屋が燃えると、周囲100軒が燃えました。

空襲の主な目標はドックや造船施設のあった港でした。そこには何隻かのドイツの船もいて、私はこれらの船の船長やオフィサーたちをたいてい知っていました。私の義弟は、長いこと神戸にいて、ほかのドイツの船に油を供給していたタンカーの一等航海士でした。私の夫の妹は、以前はオランダ領インドで看護婦として働いていたのですが、独身のまま私たちと一緒に神戸に来て、彼と結婚しました。結婚式は神戸で行いました。悲しいことに、彼の船も襲撃を受け、彼は船と一緒に沈んでしまいました。その「ロスバッハ」という船はアメリカの潜水艦に撃沈されたのです。『Der Blockadebrecher（封鎖破り船）』という本に義弟の名前も載っています。

未亡人となった義妹は、大阪でタイプライターの会社の仕事をしていたマー

テルンという名前のオーストリア人と結婚しました。彼女は死ぬまで日本にいました。義妹は神戸で埋葬されました。義父も神戸に眠っています。

私自身は幸運に恵まれました。神戸の山の上のきれいな家に、私は娘と一緒に1945年以後も残ることができました。私たちのすぐ近くに住んでいたビジネスマンに率いられたドイツの代表団が個人的に敗戦後の日本を占領したアメリカ軍のところへ行きました。当然ですが日本はもはや私たちの面倒をみる立場にありませんでした。ドイツ人はどこからお金をもらえばよかったのでしょうか。アメリカ占領軍が私たちの面倒をみることになったのです。この時期私たちには、一部屋だけ無傷で残ったドイツクラブで一定の食料が配られました。

私たちのドイツへの帰国の旅は、1947年、全ドイツ人の本国送還という流れのなかで、神戸から始まりました。夫とはようやくドイツの故郷で再会しました。7年の後—インドネシアでの収容、私にとってははじめは全くの異国だった日本での下船そして長い生活—、7年の後に夫と私はついに抱きしめ合ったのです。

*聞き取りは1997年12月10日にボンで行われた。

3. フリードリヒ・グライル氏の体験

Friedrich Greil: 1902年12月8日、ハルバーシュタット生まれ。1928年、芸術と演劇を勉強するため自力で来日。1936-37年、大森のドイツ学園で造形芸術の講師。1937年から東京のNHKで働く。千葉県大原町在住。

25歳だった1928年、私は日本への憧れに捉えられました。ミュンヘンの演劇博物館で日本の劇場の内部をかたどった模型を見たことがきっかけでした。模型には回り舞台まであり、その説明を読んで、回り舞台は日本で考案され、

はるか後によくドイツで作られたことを知ったのです。それは、日本に対する私の関心、たとえば日本の演劇に対する私の関心が呼び覚まされたひとつの例に過ぎません。私は芸術一般に関心をもっていました。というのも、当時の私は絵画やグラフィックアートに取り組んでいたからです。私は普通のサラリーマンとして故郷の小さな町、キュードリンプルクで暮らしていたのですが、時々ベルリンやドレスデンに行き、ドイツの芸術を楽しんでいました。そういうわけで、私は日本へ旅することを決めました。一人だけで。それは私にとってたいへんな計画でした。両親は同意してくれました。

鉄道でシベリアを渡り、10月のある日、朝鮮の釜山を経由し下関に到着し、さらに東京に行きました。

東京についてすぐにヴィルヘルム・グンデルト博士を訪ね、日本と日本の芸術について初歩的な知識を与えてもらいました。彼が紹介状をいくつか書いてくれたので、私はまず築地小劇場を訪ねましたが、そこでは日本演劇ではなく、外国の戯曲を見ることになりました。それは私が母国で知っていたような芝居でした。たとえばマクシム・ゴーリキーの有名な作品『夜の宿』⁹でした。

日本人の役者たちが、彼らにとって本当は異質な演劇形式を舞台にのせているということに強い印象を与えられました。ゴーリキーの『夜の宿』のほかに、もいくつかの戯曲、とくにドイツやロシアの戯曲が日本語に翻訳されていました。たとえば、ニコライ・ゴーゴリや、レフ・トルストイの『闇の力』¹⁰です。

しかし私は日本の演劇を知りたいと思いました。翌1929年に私は初めて東京の歌舞伎座に行きました。私はすぐにこの日本の演劇に心を奪われ、現在でも歌舞伎には格別の関わりをもっています。私は有名な歌舞伎役者たちと知り合

9 ロシアの作家ゴーリキー作の4幕の戯曲『どん底』（1902年10月モスクワ芸術座によって初演）。日本においては1910年小山内薫の自由劇場が『夜の宿』と題して上演して以来、新劇の最も人気のある出しものの一つとなった。

10 パリの自由劇場で1888年に初演された自由主義的な農民劇。

い、乏しい日本語力ではありましたが、彼らとたつぷり語り合いました。たとえば、当時非常に有名だった中村吉右衛門（初世、1886-1954）や松本幸四郎（7世、1870-1949）とです。

ドイツでは私はまったく日本語を学んでいませんでした。今でも私の日本語はお粗末なものです。私は歌舞伎を一何と言ったらいいいでしょうか—言葉ではなく、自分の感覚で楽しんでいます。というのも、言葉はどのみち理解できないからです。しかし、私は演劇を愛しているので、日本であれ、ほかの国であれ、演劇に対する感覚を、たとえば歌舞伎に対する感覚を一特別の語学の知識がなくても理解できるように—発達させたのです。私は歌舞伎についていろいろ書いてきました。たとえば、ドイツや日本の大学の演劇関係の雑誌にです。私が書いたもののなかには、当時や現代の名優たちの写真が見られます。たとえば、シェイクスピア劇の松本幸四郎です。とくに私の心を動かすのは、現代の俳優の先代たちをすでに当時見ていたということです。松本幸四郎の祖父を私はすでに1920年代のはじめに見ていましたし、今の中村吉右衛門は当時の吉右衛門の孫です。

私は、私の学生たちの文集を「夢と現実」というタイトルで編集したことがあります。一人の学生はそのなかで「夏休みのある日、私は母と歌舞伎座に行った。歌舞伎は能と文楽に並ぶ日本の代表的な古典演劇である」と書いています。彼はさまざま書いたあとに、「上演が終わるのは21時頃である。観劇のあと私たちは銀座を散策した。気持ちのいい日であった。しかし、ヨーロッパ人がこのまったく独特な日本文化を理解することは可能なのだろうか」と締めくくっています。私はこの学生に答えを書きました。「ヨーロッパ人は歌舞伎というこの日本独自の芸術を理解することはできないかもしれないが、それでも愛することはできる。エキゾチックな美人を見て、たとえ彼女の言葉を理解できなくても、賛美し愛することができるように」と。

私は奨学金を受けていませんでしたが、日本に着いて間もなくドイツ語を学

んでいた日本人の学生を生徒にもちました。それに日本人学生たちに多くの友人ができました。彼らと夏には山へ行きました。1929年の夏には二人の学生と初めて富士山に登りました。今の新聞で夏に何百人もの人たちが毎日富士山に登るという記事を読むと、私たちが7月に登ったあのときに10ないし15人の登山者にしか会わず、グループはひとつもなく、個々の登山者にしか会わなかったことを思い出して、つい微笑んでしまいます。時代はかくも変わったのです。

私の放送の仕事は1937年に始まりました。6月に私は愛宕山¹¹で最初の放送をしました。当時はそこにNHK「ラジオ東京」がありました。短波放送用の小さなスタジオでした。そのすぐあと、7月には満州事変が起きました。そのとき、ドイツ語グループの同僚たちと私は多くのことをしなければなりませんでした。軍部の検閲は日本ではとても厳しいものでした。私たちは放送で「戦争 (Krieg)」という名称を使うことを許されず、「紛争 (Konflikt)」と言わなければなりませんでした。ちなみに、ドイツの放送局も同じで、「中国紛争 (China-Konflikt)」と言っていました。日本と中国の軍事的対立はエスカレートしていきましたが、あの頃は人々が国粋主義的で、中国紛争に介入するのを日本にとってまったく正当な行為とみなしていました。それは1937年の古い記憶です。

ドイツ大使館は戦争中私たちに、ドイツ人へ短信放送をするように依頼してきました。終戦まで続けられたこの「挨拶放送」を私が引き受けました。私は自分の両親にも短信を送りましたが、これが両親に届いたかどうかは分かりませんでした。もちろん、戦争末期は郵便も不通でしたし、ほかのコンタクトを

11 東京都港区芝公園の北に続く小丘。1925年7月、ここに設けられた東京中央放送局の放送所から日本初のラジオ本放送が開始された。

取る可能性もありませんでした。しかし短波を通してコンタクトをとることができたのです。何某から何某へよろしくとの伝言、というわけです。ただし、放送されたのは一般的な挨拶だけです。日本にいたドイツ人はそれで彼らがまだ生きていることを伝えることができました。今日一般には、このようなドイツ向けの短波放送が短波で送られていたことは知られていません。

ちなみに、私の知る限り、戦時中 NHK の放送は外国の放送によって妨害されたことはありません。つまり、対戦国はラジオ東京が放送している伝言のことを心配していませんでした。それを重大なものと思わずともなく、笑って済ませていたのかもしれません。

「ラジオ東京」という名称は後に「ラジオ・ジャパン」に変更されました。アナウンサーとして私はほとんど毎日スタジオにいて、英語で入ってくるニュースをドイツ語に翻訳していました。それらのニュースはほかの言語でも放送されました。私は非常に忙しく、満足もしていました。気に入りまた没頭できる仕事があったのですから。

たとえば1941年12月8日に対米戦争が勃発したときのことを思い出します。私はただちにスタジオに向かわなければならず、英語の文章を読み、それをすぐにドイツ語に翻訳しなければならなかったときには当然ながら少々興奮していました。いずれにせよ、私がこの12月8日の朝早く—4時半でした—スタジオに行き、「東京の天皇司令本部（大本営）によれば…」等々とアナウンスしたときのことを今でもありありと思い出します。当時報道内容はいつも大本営から来ていました。

報道内容はいつもかなり抽象的でした。多くの海戦があり、アメリカの戦艦が日本の戦艦を沈め、アメリカ軍はそれで大きな戦果をあげたのですが、それについてあまり報道されることはありませんでした。というより全く報道されませんでした。アメリカ軍は次第にフィリピンから日本へ向かって突き進みま

した。いわゆる「島跳び」です。私たちはそれを知っていましたが、放送では伝えられず、すべては抽象的に表現されました。

私は1945年の8月の日本の降伏もドイツへ向けて放送しました。私は当時赤坂に住んでいて、すでに2回焼き出されていました。家から日比谷公園に近い内幸町の放送局へ歩いて行きました。到着すると、私は入り口が静まり返っているのを不思議に思いました。本当なら門衛がいるのですが、見当たりませんでした。私はそのまま中へ入ることができました。そこでドイツ語グループの女性の同僚と会い、彼女は「全てが終わった。天皇陛下が放送でお話になった」と言いました。もちろん国内放送だったので、私はそれを知りませんでした。それから私は英語の原稿を見て、それを放送しました。同僚たちも私もみんな難しい顔をして暗澹たる思いで座り込み、どうしたらいいのかと言っていたのを今でもありありと思い出します。

戦後は赤十字を通した知らせだけが入ってきました。長いことそういう状態が続きました。赤十字から郵便が届くと、それに返事をすることができたのですが、返信がドイツに届くまで時間がかかりました。とにかく自由に手紙を送ることはできました。私も両親から返信を受け取りました。両親は、私がすべてをうまく乗り越えたことを喜んでいる、と書いてよこしました。手紙はいつも短いものでした。

先ほどお話した日本人の学生たちの作文には考えさせられることが少なくありませんでした。彼らのうちの3人は長崎と広島の実爆投下について書きました。それは非常に印象深いものでした。ここに上田という学生が1955年に書いたものがあります。

「私は1934年2月に広島郊外で生まれた。私が生まれた家からは南に静かな

瀬戸内海を見渡せた。今でも原子爆弾の嫌な忘れられない記憶が残っている。その非人間性を体験したのは私たち日本人だけだ。私が10歳だった1945年8月6日、私は国民学校に行っていた。午前8時に私たち生徒は校庭に整列して、校長先生のいつもの退屈な話を聞いていた。間もなく一人がある方向に飛行機が飛んでいるのを見つけた。しかし、まだ警報が鳴っていなかったので、誰も、それが敵機であるとは考えなかった。校長先生の話を聞かずに私たちはじっと飛行機を見ていた。間もなく小さな白い粒がゆっくり落ちてくるのが見えた。それがパラシュートをつけた原子爆弾だったが、それが分かったのはあとになってからだった。小さな白い粒が山の背後に入るとすぐに、突然非常に強い光が私たちの目に飛び込んできた。それに続いて爆音がしてほとんど耳が聞こえなくなった。多くの者は顔を伏せて横たわり、あちこちの方向に走り始めた者も多かった。私も無意識に光線と爆音の反対方向に走った。間もなく家に帰り着くと、家の窓ガラスが全て爆風で割れていた。私の母は広島第1中学校に行っていた兄のことを心配した。しばらくすると畑に出ていた父が弟と妹を連れて帰ってきた。すぐに父は食べ物と飲み物を持って長男を探すために燃えている町に行った。しかし、兄は見つからなかった。彼の学校の校舎は灰燼に帰し、生徒たちが身につけていた焼けた金属製品だけが見つかった。私の兄は校舎のなかで火に包まれて死んだのかもしれない。その後私たちは顔や手足に焼けどをした多くの人々を見た。私たちの教室にはこうした気の毒な人たちが収容された。8月のある日、私たちは学校へ行かなければならなかった。私たちはマットの上に死者が横たわっているのを見た。彼を覆っていたのは数枚の紙だけだった。たくさんの蠅が彼の周りを飛んでいた。私は子どもの感覚で、戦争は最悪だ、再び平和がつくられなければならない、と考えた。これは私の個人的体験の話である」。

上川という別の生徒は、彼の作文の最後に次のように書いています。「私には決して忘れられないことがある。それは父の死だ。父は広島で原爆投下のと

きに行方不明になった。毎日母は行方不明の父を探したが見つけれなかった。毎夕、陽が山の背後に沈む頃、私は遠く伸びる夕焼けに赤く染まった母の悲しげな顔を見た。このような経験がなければ、私の子供時代はもっと素晴らしかっただろう」。非常に印象深い作文でした。

原爆投下のニュースを私たちは当然ながらすべての言語で放送しました。しかし、そのニュースは、今から見れば、ちゃんと事態が理解できないような抽象的なものでした。放送では「多数の人間が爆弾によって死亡した」というような言い方がされました。数千人とか数万人ではなく、ただ「多数の人間」としか言われませんでした。このニュースは翌日伝えられました。新田という同僚に私は英語で書かれたニュースを見せられました。恐ろしく多くの犠牲者があったという事実はしかしながら意識的に隠されました。「新型爆弾」について伝えられ、「原子」という単語は使われませんでした。それはこの時代にはまだ知られていなかったのです。

私はよく放送局に泊まったのですが、あまりよく眠れませんでした。5、6人のアナウンサーたちと一緒に泊まり、誰かが放送の仕事で夜中の2時に起きなければならないというようなことがあったからです。いずれにせよよく眠れず、翌日自宅のアパートで眠り足したものです。そのアパートから爆弾で焼きだされることになりました。それは1945年4月のある晩のことでした。その晩のことを私はまだはっきりと思い出せます。あのとき私は放送局ではなく家にいました。22時ごろに空襲警報が鳴りました。私は警報が鳴るかもしれないと思っていたので服を着たままベッドに入っていました。このようなときには、近くの防空壕に入るようになっていたのですが、私はどうにでもなれという気持ちでした。なるようにしかならないと思い、残っていました。するとB29爆撃機がやって来て、近くに爆弾が落とされました。数百メートル先の上智大

学でした。私のアパートの窓ガラスは吹き飛びました。戦後になって分かったのですが、それは爆裂弾だったからです。アメリカ軍によって爆裂弾と焼夷弾が合わせて投下されました。麹町あたりから火がすばやく広がりました。私は用意してあった必要な物を詰めたトランクを持って、歩いて赤坂に行きました。夜どおし歩き、数時間かかりました。私は前もって一人のドイツ人女性と約束を交わしていました。何か起きたら赤坂の彼女のところへ来るように、と彼女に言われていたのです。彼女は一人で、河口湖に疎開していた大使館員たちのための家を守らなければなりませんでした¹²。私は朝に到着し、彼女の好意でそこに寝泊りできることになりました。

当時は無傷の公共交通機関はほとんどありませんでした。市電の架線が至る所爆撃で破壊されていたからです。何日も、あるいは何週間も市電が動かないことがありました。

この頃、私の友人で、新宿に近い淀橋に住んでいたササキ・マサコという日本人の女医さんの家が焼けてしまいました。5月24日の夜から25日にかけての大空襲のあと—それはアメリカ軍のB29爆撃機による東京への最後の空襲でした—私は、その友人の家が爆撃を受けたかもしれないと思い、彼女を探しに行きました。彼女を私は防空壕のなかで見つけ、赤坂の私の家に連れて行きました。それ以来私たちは一緒に住んでいます。ご覧のとおり、現在彼女は私の妻になっています。それは50年前のことでした。戦争が私たちを結びつけたのです。

いい思い出もあります。たとえば、当時大森にあった東京のドイツ学園の思

12 1944年夏、ドイツ大使館は東京から河口湖畔の富士ビュー・ホテルに主たる部局を移し、大使館員および家族も河口湖近辺に疎開した。この間の事情はガリンスキー氏の証言（『文化論集第16号』139頁以下）に詳しい。

い出です。私は1936年から1937年まで1年間ドイツ学園で造形芸術の講師として働きました。校長はヴィルヘルム・レーデッカー氏で、私はスケッチと図画の授業をしました。ドイツ人の子供たちと一緒に作業するのはとても楽しかった。彼らは夢中で絵を描いたり、切り絵をしたりしました。ここに生徒の名簿があります。1940年の年末のものです。あのとき88名の生徒が大森のドイツ学園にいました。この名簿には彼らがドイツ人かどうか記載されていますが、ほぼ全員ドイツ人で、イタリア人が数人いました。

異民族結婚の子供たちもいました。たとえばヘルムート・ケーテル氏の息子たちです。ケーテルはドイツレストラン「ラインゴルト」を銀座に開いていました。そのほか東京には、ジャーマン・ベーカリーもありましたし、「フレデーマウス」というバーもありました。横浜にも「ハイデルベルク」というバーがありました。もちろん、こういう店のことはよく覚えています。食料が簡単には手に入らなかった戦争中、私たちはそこでドイツの食物を得ていたからです。たとえばジャーマン・ベーカリーでは良いパンを買うことができましたし、時々ケーテルのレストランで食べていました。アウグスト・ローマイアーは東京でレストランを開いていましたが、ソーセージの製造もやっていました。私は彼のところで時々昼食や夕食をとっていました。私は独身男でしたから、一人で食料を手に入れ、家で食べなければならなかったからです。

ほかにはあまりドイツ人とはコンタクトがありませんでした。エルビヴィン・ヴィッケルト¹³という同胞と戦争中たびたび放送局であったのを覚えています。彼は大使館員で、何度か話をしました。ちょうど今新聞で、エルヴィン・ヴィッケルトがドイツで80歳の誕生日を祝ったという記事を読んだところ

13 後にドイツ作家協会会長にもなった Erwin Wickert の自伝 “Mut und Übermut” は、彼が東京のドイツ大使館に勤務した1941-47年について書かれた部分が『戦時下のドイツ大使館』（佐藤真知子訳、中央公論社1998年）として翻訳出版されている。

です。彼の息子が東京で生まれたのは戦争の最中でした。1943年に私は彼と出会い、後にも会いました。

日本人の医者診療は非常に優れていました。ドイツ人の医者たちもいましたが、それは別として日本の医者たちはたいていドイツで教育を受けるか、あるいは何らかのかたちでドイツの影響を受けていて非常に有能でした。この点に関しては好ましい話しかありません。ちなみに、戦争中に日独の医者たちの協会「日独医学協会」も設立されています。1938年のことで石橋長衛博士が会長になりました。この石橋博士は、医学の分野での日本とドイツの協力を尽くし、文化的関係の擁護者としても非常に有能でした。彼は数回ドイツを訪ねているので、ドイツでも彼の名前は知られていました。

日本の医師たちにとってドイツ語は最上位にありました。ドイツ語を話せるだけでなく、ドイツで行われているような医学についての知識をもっていることも日本人医師にとっては絶対に必要でした。

私は、ドイツの製薬会社、たとえばバイアーやIG ファルベンが非常に有名だったことも言っておきましょう。ドイツの医薬品は日本の医者たちに好んで使われていました。彼らはドイツの薬が信頼できることを知っていたからです。日本の医学は以前はまだ中国の影響を受けていましたが、ドイツの薬が中国の薬より効くことが一般にも知られるようになっていました。

*聞き取りは1995年6月23日に千葉で行われた。

4. アンネリーゼ・バイアー夫人の体験

Anneliese Beyer: 1924年3月3日ボン生まれ。1927年から1944年まで水戸在住。1945年から1949年まで家事手伝いおよび英語教師として軽井沢に、1949年から1954年まで店員として東京に住む。1954年ドイツへ帰

国。その後、1957年から1960年まで東京のコッパース・ジャパン社の秘書および通訳として日本に滞在。その後の職業は翻訳家。

私は1927年に3歳で日本に行きました。東京に大きな地震（関東大震災）が起きてから4年後のことでした。私の父はもともとインド学を専攻していましたが、ドイツで教職に就くのは非常に困難でした。ですから日本の文部省をとおして、水戸の大学でドイツ語の教授として教えないかという話を受けたときに、すぐに承諾しました。水戸は東京の北の方にあり、当時は汽車で2、3時間くらいでした。父は、末っ子の私を含め3人の子ども連れてドイツを出発しました。

水戸は中都市で、当時は私たち以外にドイツ人はいませんでしたが、他のヨーロッパ人はいました。たとえば、私たちの隣人は同じ大学のイギリス人教師でした。そのほか宣教師も何人かいました。

私は日本で学校に通いましたが、すべての授業に出ていたのではありません。父が私の教育をしていたからです。父は、私が日本にずっと留まることはできないということをはっきりと認識していました。当時西洋人が日本で働くことはほとんど不可能でした。そうするためには、私は完全な日本の教育を受け、日本の職業に就かなくてはなりません。しかし、父は私がドイツへ戻ることをいつも望んでいました。ですから、10歳から11歳にかけて2年間私はドイツにいました。父は午後1時に大学から帰宅すると、日本語、算数、英語、ドイツ語そしてフランス語を私に教えました。

私は素朴な「子どもの日本語」を覚えたのですが、父自身は、とても洗練された日本語を話しました。父が普通の人たちと話をすると、相手は父の話すことが理解できませんでした。父がたいへん複雑な表現で話をしたからです。そ

ういうときは、私を呼んで通訳させました。母は最後まで日本語を正式には勉強しませんでした。母は買い物はできましたが、近所の女性たちや教授の奥さんたちと会話することはできませんでした。そこまでは上達しませんでした。父も母の日本語を上達させようとは思っていなかったようです。私はいつも女の子たちと一緒にいたので、私も自然に女言葉を覚えました。女言葉は男言葉とはまったく違います。

私が学校に通ったのは、当時女の子の教育に不可欠と言われていた、絵、歌、刺繍、体操などのためでした。私には例外規定が認められ、私は特定の授業にだけ出ればよかったのです。私は学校で言葉と文字は学びませんでした。それは父に教えられました。私はクルト・マイスナーのところで通訳の試験にも合格しました。私は4000文字が分かりました。

それでも私は学校友だちと一緒にいて、下校も一緒にするよう学校に残っていたこともあります。私は女の子の友だちの家によく遊びに行きました。ある友だちの家では、父親が午後にはたいてい仕事仲間と碁盤を囲んでいました。母親がせっせと縫い物をしている傍らで碁を打っていました。すべては床の上で行われていました。

水戸では、私は若いドイツ人と会うことはありませんでした。会っていたのは日本人ばかりです。時々東京に行きました。東京にもBDM (Bund der Deutscher Mädel ドイツ女子青年同盟) があり、DJJ (Deutsche Jugend Japan 日本・ドイツ青少年団) と名乗っていました。年1回、私は青少年キャンプに行きました。私たちはこの団体で日本各地に親善旅行に行きました。30, 40人の子供が行きました。いろいろな町で、そのなかには神戸もあり、市長に迎えられました。もちろん、私たちはみんな注目の的になりました。私は背が高く、体も比較的がっしりしていました。私のブロンドの髪はどこへ行っても触られたものです。ある祭では神輿を担いだこともありました。普通は若い男た

ちが担ぐのですが、彼らは「君は頑丈に見えるから、神輿を担いでごらん」といつも言われました。私は本当に注目的になりました。人々は人垣をつくって私を見つめました。気持ちのいいものではありませんでしたが、自然に慣れました。

ナチ時代のイデオロギーは、水戸にいた私のそばを素通りしていきました。ドイツの青年たちは東京で集会を開いていましたが、水戸ではそれに関わりをもちませんでしたし、私の父もまったく指図を受けることはありませんでした。たとえば、父は、どんな本を教材に使わなければならないか指示されることもありませんでした。私自身は、熱狂的なドイツ信奉者でした。ドイツは私たちにとって至高のものでした。若いときには、おかしな考え方をするものです。私は、あの行進やハイキングやその他すべてのものを素晴らしいと思っていました。

水戸の私たちの家は、日本人がヨーロッパ的と理解しているようなものでした。2階建ての家でしたが、たいていの家は平屋で、ほかに2階建ては稀でした。外国人教授専用の家が2軒あり、日本人が、西洋人の家はこうだろうと考えたように建てられていました。私たちの家には畳の間が1部屋しかありませんでした。そしてそれは女中用の部屋でした。ドイツの石炭ストーブもありました。私の友達はいつも私を羨ましがっていました。自分たちは一当時の日本ではそれが普通だったのですが—6人家族で2、3部屋の家に住んでいるのに、私たちの家は素敵で部屋もたくさんある、と彼女たちは言っていました。

私の両親はドイツから自分たちのベッドをもって来ていました。当時すでに日本でもベッドを手に入れることはできたのですが。両親のベッドは、病院にあるような鉄製のものでした。兄たちと私も同じようなベッドで寝ていました。居間は藤の家具で調えられていました。父は食卓を買うことができなかったので特別に作らせました。どの家庭でも日本ではあのような食卓は使ってい

ませんでした。

ドイツ料理の食材もいくらかは水戸で手に入りました。バターやパン、もっともパンは白パンだけでしたが、それにジャガイモやいろいろな野菜もありました。私は最近、いつ日本人がジャガイモを食べていたのか考えてみたのですが、私が子供の頃、知り合いの家で午後のお茶のときにジャガイモが出されたことを思い出しました。皮つきの茹でたジャガイモに醤油がかけられていました。ほかに、ジャムつきの酵母入りパンやバタークリームのトルテのようなものもありましたが、リンゴケーキやビスケットはありませんでした。肉も手に入りました。でもソーセージはありませんでした。水戸では、魚屋は数百軒あったのに肉屋は3軒だけだったと思います。値段は非常に安く、母はびっくりしていました。母がある肉屋さんのところに焼き肉用の肉を買いに行くと、その肉屋さんは、母がたくさん買うので、豚の腎臓を5個おまけにくれました。日本にはそれを食べる習慣はなかったのです。すべての肉はいつも小さく切って料理されていました。

私たちはドイツの祝祭も祝いました。クリスマスと復活祭は家で祝いました。村の若者たちが集まってきて塀越しにのぞき込んでいたものです。私たちは隣近所すべてと、教授たちの奥さんや子どもたちを招待しました。彼らは、新しい服と靴をこのおめでたいことのために着ずに取っておきました。私の母はいつも自分で料理をしましたが、一度も和食は作りませんでした。最初の頃だけ私の家には女中がいて、私たちのために料理をしてくれました。日本人が大好きな味噌汁も作ってくれました。昔の日本人はまず朝食に味噌汁を食べ、1日3度米を食べていました。屋外で米を炊く人もいました。女中は竈に火をおこし、そこに釜を置きました。この釜はまん丸で、とても厚い木の蓋がついていました。そうやって炊かれた米は格別の味がしました。

大きな問題は服と靴でした。とくに、大きな靴のサイズでした。しかし私たちはまだドイツに親戚がいて、いつも望みの品を私たちに送ってくれました。そのほかには、服を仕立てさせていました。たとえば、軽井沢には西洋人専門の仕立屋が何人かいました。彼らは夏の数カ月間東京からやって来て、冬の間閉めていた彼らの店を開けました。

基本的に夏は水戸では過ごしませんでした。水戸はたいへん暑く、我慢できませんでした。ですから私たちは、海辺か軽井沢に行きました。軽井沢ではあちらこちらに空き家があり、私たちはそのうちの1軒を3ヶ月間借りました。それらは洋風の家で、一部は三菱の社有物で、個人のものもありました。昔の軽井沢は夢のように美しいところでした。モダンな小さな町で、みんなが駆け回っていました。外国人で一杯でした。乗馬やテニスができました。

1944年に、水戸が太平洋の方から爆撃されたため、私たちは水戸を去らなくてはなりませんでした。父は大学を解雇され、私たちは軽井沢山中に移りました。軽井沢にはドイツ人が何人か集まりました。私たちドイツ人は同盟国の国民でしたから、収容されることはありませんでした。他の西洋人は収容を免れませんでした。軽井沢で私はドイツ人ペンション「レーデッカー」に良い職を得て、ほぼ1年間そこで働きました。私の父はこの時期はドイツ人コミュニティーの子どもたちを教えていました。父は子どもたちを集めて、とくに英語に力を入れて授業をしていました。そうして父は何とか私たちを養ったのです。私はそれから1949年まで軽井沢にいました。私たちは本国へ送還されなかったからです。

父が政治にまったく関与していなかったので、私たちは長期滞在許可をもらいました。しかし、たいていのドイツ人は軽井沢を去らなくてはなりませんでした。私が（ナチの制度として課されていた1年間の）家事労働義務を果たし、その後も引き続き働いていた家の家族も1947年に日本を離れなくてはなりませんでした。私は、あの家族が命令を受けたときの様子をまだはっきり思い

出すことができます。ドイツ人の本国送還を、私は、駅で別れの手を振るとい
うことでだけ体験しました。それだけでも十分に哀しい気分になりました。知
り合いがみんな去っていったのです。でも、私たちは2年前にハンブ
ルクでみんなと再会しました。

1949年に私は東京に戻りました。1950年だったはずですが、私の両親も東京
に来ました。私はその間にドイツ人の肉屋「ローマイアー」のところで職を得
ていました。この店は当時と同じかたちではもう存在していません。ヴェスト
ファーレン出身のローマイアーさんの娘は、今でも私の良い友人ですが、彼女
とはBDMで知り合いました。ローマイアーさんの奥さんは日本人でした。彼
は1916年から1917年にドイツ海軍の海兵として青島に行き、そこで日本軍と戦っ
て、その後5、6年間日本に抑留されていたのです。収容されていた間、彼は
嫌な体験はしませんでした。私が、どうだったのか訊くと、彼は「素晴らし
かったよ。私はソーセージを作って、他の人たちに食べさせていたんだ。まっ
たく問題はなかったよ」と言っていました。釈放されたあと、彼は日本に残っ
て店を開き、結婚して3人の子どもをもうけました。ローマイアーの店で私は
3年間働きました。あの店は食肉の製造販売とデリカテッセンの販売をしてい
ました。日本人は一般にはソーセージを食べなかったのに、よくあの店に買い
に来ていました。当時このドイツの風俗は新しいものでしたから、あの店で買
い物をしていたほとんどの日本人客はすでにドイツに行ったことがあるか、西
洋文化に興味をもっていた人たちでした。ローマイアーは東京では名が通って
いましたから、年配の人は誰でも彼を知っています。現在、あの店はもうロー
マイアー家の手にはありません。老ローマイアーが亡くなったときに、手放さ
れ、名前だけが一緒に売られたのです。

私の父は、戦後再び3年間東京で教え、1954年に亡くなりました。私は父の死
後すぐにドイツに帰りました。母は後に、日本で過ごしたこの25年は彼女の

生で最も素晴らしい年月だった、と言っていました。

数年前に私は再び日本に行きました。水戸では、私の父を偲ぶ大きな式典が開かれました。新聞にも、彼の娘がやって来ている、と書かれました。水戸では私は今でも通りで話しかけられます。みんなが私たちを知っていたのです。

*聞き取りは1995年3月16日にエッセンで行われた。

5. ズザンナ・ツァッヘルト夫人の体験

Susanna Zachert: 1908年3月27日、朝鮮のチェムルポ（現・韓国の仁川 Incheon）生まれ。主婦として、1933年から1941年まで松本に、1941年から1943年まで横浜に、1943年から1947年の本国送還まで軽井沢に住む。1972年、3ヶ月東京滞在および四国旅行。1977年、2ヶ月東京滞在および九州旅行。2001年4月1日歿。

夫¹⁴と私は結婚後1933年に日本に行きました。そうするにはちょうど良い時期でした。ドイツの政治状況が好ましいものではなかったからです。夫は一切のことから逃れられるのをたいへん喜んでいました。夫はハンブルクでカール・フロレンツ教授の指導を受け博士号を取得していました。フロレンツは私の先生でもありました。彼は親切で、私は当時彼のところで言わば聴講生として学ぶことを許されました。というのは、私はまだ高校生だったからです。のちに高校卒業資格試験のあと、さらに6セメスター勉強を続けて、学士号試験を受けました。私は、少ししか知らなかった日本の古い文化に取り組みました。私は日本人の母から日本語を話すことは学べましたが、日本文化についての私の知識はあまり多くありませんでした。私はフロレンツのもとで日本の祭

14 ヘルベルト・ツァッヘルト (Dr. Dr.h.c. Herbert Zachert, 1908-1977) : 1949-1960年、ベルリン自由大学日本学教授。1960-1977年、ボン大学日本学教授。

についての論文も書きました。

夫はちょうど博士号を取得したところで、ドイツのどこかの大学に就職しようとしていましたが、ポストを得るのは困難でした。そこで彼は日本のいくつかの高等学校にドイツ語教師として応募しました。3校から声がかかりました。ベルリンにいた日本の外交官が、松本を選ぶように助言してくれました。風景が美しく、あそこの高等学校は名声が高く、非常に優秀で有名な学生を輩出しているといわれているから、ということでした。

この助言に私たちは従いました。私たちは、1933年から1941年まで8年間、好んで松本に暮らしました。当時の松本はまだ小さな町で、むしろ田舎でした。絹紡績工場がひとつと中学校がひとつ、高等学校などがあるだけでした。まだ本来の意味での戦争がなく、楽しい時代でした。私たちは銃声やヒトラーやドイツのさまざまな問題から遠く離れていました。

二人の子どもが日本で生まれました。長女は1934年、明仁天皇が生まれた年¹⁵に生まれました。7月25日、松本の天神祭の日でした。だから娘は本当に賢い子でした。書と学問に秀でた菅原道真を祭る日に生まれたのですから。息子はその3年後の1937年4月に生まれました。

日本に到着すると私たちは直接松本に向かいました。松本には、高等学校で教えるイギリス人のため官舎と、ドイツ人のための官舎がありました。こちらの方が少しきれいな家でした。それは洋風の家で、私たちは間取を喜びました。下に2部屋と2階に4つの小さな部屋がありました。けれども、私たちはこれらの部屋に家具を入れなければなりませんでした。夫は1.86メートルありましたが、私たちは最小限のものとしてドイツから丈夫なベッドをもってきました。

15 明仁天皇の生年は1933年が正しい。

ていました。肝心なのは、まずよく眠れることです。それから、私たちは家具を松本の家具職人に注文しました。私たちはドイツからカタログをもってきていたので、それを見せて彼に私たちが欲しいものを伝えました。値段は高くありませんでしたが、その家具職人は実際の使い方を知らなかったで、椅子の座り心地はよくありませんでした。私たちはそれで椅子を返して作り直させました。私たちが考えていたほど簡単ではなかったのです。

畳の部屋もありました。それはとくに夫のお気に入りでした。3畳半あるいは4畳の大きさで、そこで好んで食事をとりましたし、週に一度は和食を食べました。しかし、日本人を驚かせたのは、私たちが二人の乳飲子の入浴もその部屋でさせたことでした。私たちはタオルを広げていたのですが、日本人は畳が湿ると言っていました。しかし、私たちは膝をつくことができましたから、水はまったく飛び散りませんでした。風呂場を私たちは好きではありませんでした。居心地が悪く、寒くて、隙間風が強かったのです。

台所を私たちの考えどおりに調えるのはたいへんでした。最初私たちは日本の竈と火鉢で料理していました。ガス・オーブンを神戸から取り寄せなければなりませんでした。

私たちは、たとえばライ麦粉など、多くの食料品も神戸に注文していました。私の夫は最初の頃は我慢して白パンを食べていました。それはトーストにすると美味しかったのですが、夫はその後いつも、綿をかむようで嫌だ、と言っていました。彼は黒パンを食べたがったのですが、それは松本では買えませんでした。それで私は、松本に住んでいて経験をもっていた宣教師たちに相談に行きました。パン種を私はパン屋に分けてもらいました。彼は私たちにいつも1食分づつ分けてくれました。私は小麦粉とライ麦粉を混ぜました。そして、ブリキ工に蓋付きの型を作らせ、それに入れて本物の黒パンを焼きました。今でも私は、昔の学生たち―彼らは当時20歳くらいで、私たちは4歳ほど

彼らより年上でした一が、あの黒パンに自家製のオレンジ・マーマレードをつけて食べるといつもとても美味しかった、と言うのを耳にします。

パン用の粉はその後松本でも「ヨネダヤ」で買えるようになりました。それはヨーロッパのものを売る店でした。しかし、手に入れにくいものも少なくありませんでした。たとえば、バターはそこで買えませんでした。あの店で働いていた老婦人は奇妙なことに無愛想でした。ほかの日本人はとても愛想がよかったのです。彼女はユーモアに欠け、私たちは彼女のところへ行行くのが嫌でした。その後、私たちが買わなくなり、彼女のところの品揃えが多くなると、彼女の愛想がよくなりました。

私たちの家には、わが家の子守であり、家事万端をこなすお手伝いさんでもあったアイコさんも住んでいました。彼女は女学校を卒業してすぐに私たちの家にやってきました。17歳か18歳でした。彼女は物覚えが早く、子供たちの扱いも見事でした。私たちが1947年に本国送還されるまで、彼女はうちにいました。彼女は私たちと一緒に1941年に横浜に移り、その後軽井沢にも一緒に行って、私の息子と学校の宿題をしてくれました。アイコさんはいつも私たちと同じ家に住んでいました。使用人用の小さな畳の部屋しかありませんでしたが、押し入れと布団その他のもので満足していました。私が、今週はいついつ休みを取りなさい、と言っても、いつも彼女は休みを取ろうとはしませんでした。それが私には理解できませんでした。

彼女は私たちの家にいるのが好きでした。戦争中に彼女がどうしているかよく分からないことが時々あっただけでした。3日間松本のご両親のところへ行くように私が言ったときも、彼女は逆らいました。彼女の実家はあまりうまくいっていないようでしたが、彼女はどんな様子か決して言いませんでした。彼女が私たちのところにすでに長くいるのに、彼女を助けてあげられないことが私には気掛かりでした。

私たちは彼女に戦後ドイツから手紙を書きましたが、彼女は短期間結婚生活をして、間もなく亡くなったということを聞いただけでした。ですからそれ以上連絡は取れず、とくに息子はそれを悲しみました。彼はのちにドイツの学校で彼女について作文を書きました。

私の子どもたちは日本人の子どもたちと遊ぶのも好きでした。ほかに外国人の子どもはいなかったのですから。二人が通りにいると、いつも日本人の子どもたちが彼らの周りに集まってきて、目をみはっていました。子どもたちにアイコさんは、なぜ男の子はこんなに白くて女の子の方はこんなに茶色いのか、男の子は牛乳風呂にいれたのか、と聞かれたそうです。私たちは日本人の子どもたちもクリスマスに招待しました。もちろん彼らにとってそれはまったく新しいことでした。

私の子どもたちは上手に日本語を話しました。彼らは、幼稚園やアイコさんから、また日本人の子どもたちとの付き合いを通して覚えたのです。彼らはよくお菓子を買いに自分たちだけで出かけて行きました。祭日には、串にさした甘い餡や醤油のタレをつけた団子がありました。私の経験では、子どもは10歳以下でその国を離れると、その言葉をとても早く忘れてしまいます。しかし、10歳以上だと、かなり多く保持します。私の娘はドイツに帰ってきたときに13歳でした。彼女は今でも上手に日本語を話します。

私は日本のことをたくさん知っていましたが、まだちゃんとこの国なりの生活をしてはいませんでした。子どもたちがまだ小さかった頃、一人の教師の奥さんがお茶を飲みに来て、子ども部屋を見たいと言ったことがありました。私たちは彼女に、私たちが作らせたベビーサークルを誇らしげに見せました。しかし、彼女は「動物園の猿の檻みたいだわ。私たちは子どもを負いますが、そんなふうに檻に入れません」と言いました。それで私は考え込んでしまい、また悲しくもなりました。しかし、私は彼女に「ドイツではそれが普通なんで

す」と説明しました。すると、彼女は「日本で子どもを負おうのは地震がよく起きるからなんです」と説明してくれました。地震が起きたら、子どもを近くにおいて、なお且つ作業ができるように両手を空けておくのです。

私が日本人を理解できないということは度々ありました。そういうときは胸にこたえました。本当に精神の危機に陥ったことが一度ありました。しかし、私は自分でなんとか立ち直りました。私が日本人のメンタリティーに馴染んだのだと考えることもできるでしょう。60年前の日本は何もかもが違っていました。

私は1908年に朝鮮で生まれました。私たちはInchon (仁川), 当時のChemulpoに住んでいました。1910年から1945年までは日本の支配下ジンセンと呼ばれていました。私は11歳まで朝鮮にいましたが、私の子ども時代は、保護され落ち着いた素晴らしい時代でした。私の両親は長崎で知り合いました。父は若い商社員としてハンブルクから長崎に来ていました。父はカール・A・ヴォルターにより東アジアに送られました。彼は母を朝鮮に連れて行き、ソウルのドイツ領事館で結婚しました。日本女性としては異例ですが、母は私たち子どもに関してエネルギーで、私が8歳か9歳のときに「日本人の母親もっているから、あなたの躰がよくないと他人に言われないように」と言ったことがありました。

私は母とは日本語で話しました。母はあまりドイツ語を理解しませんでした。父はドイツ語しか話さなかったので、母は徐々にドイツ語を覚えました。同様に、父はひどい日本語を話し、彼が自分の考えを言おうとする様は、いつも非常に滑稽でした。学校では日本の学校当局から授業を日本語でするように要求されました。私が当時付き合いのあった朝鮮人はみんな日本語を話しました。そのため、残念ながら私は朝鮮語ができません。

夫と私は1933年に日本に行きましたが、両親はずっと朝鮮で暮らしました。

父は1914年に、私たち子どもを連れてハンブルクへ移る計画を立てました。すでにトランクに荷物が詰められていたのですが、私たちが出発しようとしたときに、第1次世界大戦が始まってしまいました。それで話は立ち消えになりました。父はようやく1920年に私たちをハンブルクに連れて行き、私たちは親類の家に住んで、その学校に通いました。両親は朝鮮に残りました。合わせてほぼ60年になります。父はその間時々ハンブルクに来ましたが、東アジアの方がずっといいと言っていました。

私の娘が生後半年のとき、私たちは両親を訪ねて娘を見せるために朝鮮に行きました。クリスマスの直前に行きました。私の母乳が充分に出なかったのので、娘は哺乳ビンでミルクを飲んでいました。アイコさんも連れて行きました。私たちが列車のなかでミルクを作ると、何をしているのかと周りの日本人がジロジロ見ました。日本人の母親たちは痩せていても充分に母乳が出たのです。それが私には驚きでした。彼らは、私が細身の身体に戻ろうとしているのではないかと思ったのかもしれませんが。いずれにせよ、彼らは不思議そうに見ていました。私たちは車掌にお湯をもらい、ミルクの粉とお湯を量り、娘に与えました。私たちは船で下関から釜山に行きました。当時はプサンではなくフザンと言いました。朝鮮が日本の一部だったからです。のちに両親も私たちの息子を見るために日本に来ました。

松本での私たちの生活の中心にあったのは、当然ながら高等学校での夫の仕事でした。学生たちは高等学校での彼らの3年間を、何でもしたいことができる「浪人時代」と呼んでいました。たとえば、帽子を泥や何かのなかに放り込む、というようなことです。高下駄をはき、髪をボサボサにして型破りの組み合わせを強調して黒い学生服を着るというような、だらしない服装をすることもありました。彼らはそれを格好いいと思っていました。のちに東京大学に行った彼らが私たちを訪ねてきたとき、きちんとめかし込んで綺麗な身なりを

していたので、私たちは彼らが誰か分かりませんでした。

とくになついていた数人はよく夫を訪ねて来て、グラモフォンで音楽を聴いていました。当時はまだネジを巻かなくてはなりませんでした。彼らは音楽好きで、私たちは彼らの質問に答えられなかったり、知らないために恥をかくこともありました。ベートーベンやシューマンやシューベルトに彼らは精通し心を奪われていて、私たちを喜ばせた驚かせもしました。身近な日本の音楽を彼らは軽視し、西洋音楽こそ自分たちにとっては本物だと言っていました。

夫は多くのことに非常に良心的で義務感ももっていました。彼は本当に一度も病気をせず、学校を1日も休みませんでした。ある日、年配のドイツ語・ドイツ文学の教授が彼のところへきてこんな会話をしていました。「どうしてあなたはいつもそんなにお元気なのですか」「ええ、おかげさまで」と夫は答えました。「奥様は病気になられないのですか」「いいえ」「そうですか、でもあなた方は一度ご先祖のお墓に行かなくてははいけませんね」「ええ、でも遠くドイツにあるのですよ」。数日後、この年配の同僚がまたやって来て「1週間休暇を取って、東京の著名人たちの墓を訪ねていらっしゃい」と提案しました。夫は自身の研究にすることができると喜び、学生たちは厳しい先生がついに休むというので喜びました。

夫はよく学生たちと一緒に、テニスをしたり日帰りの遠足をしたりしました。しかし、女性や子どもたちも一緒になって日本人と何かをすることはありませんでした。それは当時は普通ではなかったのです。私が日本人の女性たちをご主人と一緒に招待したときにそれに気づきました。女性たちはみんな招待を断り、男性たちだけが来ました。学校のドイツ語の先生たちに私は「ドイツでは普通主婦も一緒に食卓について客と話をします」と説明しました。しかし、アイコさんと私は料理や飲み物を運ぶだけで、部屋の外にいました。

それから、私は女性たちだけを招待しました。最初はドイツ語の先生の奥さ

んたちを招待しました。彼女たちの一人は神戸出身で、偏見のない人でした。彼女は私に、自分たちに少しドイツ料理を教えてくれないかと提案しました。あるときレバーを料理しました。私はそのレバーを、私がそれで何をするのか不思議がる肉屋からただ同然で手に入れました。日本女性たちはこれが気に入る、それから度々その料理をしたのだろうと思います。というのは、まもなくレバーの値段が2倍になったからです。

しかし、日本人の夫妻のなかには、私たちが招待すると二人でやって来る、開かれた夫妻もいました。彼らは私たちに日本の祭日のことも教えてくれました。たとえば、私たちは新年や「小正月」に招かれました。小正月というのは陰暦の新年の行事で、たいていは2月でした。そのとき、木の枝に米の団子を結びつけました。そして、2月はじめの節分には「鬼は外、福は内」という掛け声で悪霊を家から追い出し、幸運を家に招き入れました。3月の人形あるいは女の子の祭である雛祭と5月の男の子の祭も私たちは日本人家族とともに体験しました。7月7日の七夕祭のとき私たちはたいていもう軽井沢にいました。私たちは、多くのドイツ人とともに軽井沢で夏を過ごしました。そのため、松本のこの祭を私はよく覚えていません。

松本での最初の正月、私たちは池上家に招かれました。私は大きな祭だと確信して、絹の服を着て行きました。日本人はみんな温かい服を着ていました。暖房の無い部屋で炬燵の周りに座るからでした。炬燵というのは、下から暖める小さなテーブルで、その上に厚い布団を掛け、暖を取るために足をそのなかに入れるものです。客室には熱源としては火鉢があるだけでした。そんなことを私は予想できなかったのです。凍えていると彼らは同情して私にコートを掛けてくれ、炬燵に入れてくれました。肩にコートを掛けてそうしていると心地よくなりました。

池上氏は偉大な美術収集家でもありました。彼はいつも私の夫を連れて行きました。彼は、私がそれには興味が無いと思ったのでしょうか。彼は夫に、絵巻物や高価な品を保管していた彼の保管庫を見せました。鑑賞するために彼はいつもひとつの作品しか家にもってきませんでした。当時はちゃんと指導を受ければ、まだ安く良いものを松本で買うことができました。私の夫もそうしたのですが、残念ながら本国送還のときに多くのものがアメリカー戦勝国でしたから一に没収されてしまいました。

夏の間、私たちはいつも多くのドイツ人がいた軽井沢に行きました。言葉のためでもありました。つまり、子どもたちがそこでドイツ語を話せるように、です。それは私にとっても良いことでした。長い間ドイツ人と一緒にいないで、ほとんど日本語だけを話していると、ドイツ語を忘れるということはないにしても、少々「たどとしく」なってしまいます。私は、私たちが軽井沢でドイツ人のなかにいることを喜びました。軽井沢では皆が、森のなかにあった一戸建ての家のひとつを借りました。どの家もととても美しく、夏はまさにそうでした。私は子どもたちとあそこにたいてい6月、7月、8月と3ヶ月いました。私の夫は4週間だけいて、それ以外は時々来るだけでした。のちに横浜に移ってからも同じようにしていました。

松本には外国人は少ししかいませんでした。私たちは唯一の子連れドイツ人でした。ドイツ人のフランチェスコ修道会の宣教師、ライムント神父がまだ松本にいました。彼はもうずいぶん前に亡くなりました。彼はよく私たちを訪ねてきました。典型的なドイツ人で、クリスマスを私たちの家で過ごせるのをとても喜んでいました。たいへんユーモアのある人でした。

松本にはカトリックの教会があり、日本人の教区民が集まって来ました。日本人がキリスト教徒になると、彼らは自分の信仰を非常にまじめ受け取る、と私たちは感じていました。私たち自身はカトリックではありませんでしたが、

祝祭だけは一緒にそこで祝いました。私たちの子どもの洗礼にはわざわざ東京からプロテスタントの牧師がやって来ました。

私たちはいくつか面白い出来事を体験しました。松本には周辺の地域から多くの人がやって来ましたが、彼らは私の夫を後ろから眺めていました。私が妊娠していて夫が私を病院に訪ねてきたときには、看護婦たちは彼の身長や体重を知りたがりでしたが、彼女たちは直接彼に聞くことはできませんでした。そこで彼女たちは、家族全員の身長と体重も計らなくてはならないと言うことを思いつきました。夫は私にウインクしました。彼にはそれが面白かったからです。彼は喜んで看護婦たちの言うようにしました。夫はとても重かったのです。ほぼ200ポンド（100キロ）ありました。学生たちはいつも彼を有名な相撲取りの一人と比べていました。

松本にはとても腕の良い仕立屋がいました。彼はとても小さかったので、夫の寸法を取るときにはいつも椅子に乘らなくてはなりませんでした。彼はいつも背広1着につきズボンを2本作ったので、戦争中生地が乏しくなったときには、私はその1本からスカートを作ることができました。

私たちは服を作らせることができなかったら、困ったことになっていたでしょう。また、私の夫のための着物はいつも1.5倍の長さで仕上げなければなりませんでした。

靴も作らせることができました。足型を取らせて、見本と皮を選ぶことができました、できあがった靴は素晴らしい仕上がりでした。私たちは靴をいつも作らせ、夫は一度も東京で靴を買いませんでした。買おうとしても難しかったです。

松本では冬はとてもたくさん雪が降りました。松本はおよそ海拔800メートルで、日本アルプスに囲まれています。冬の松本は厳寒でした。水の入った花瓶が寒さのために割れたことがありました。私たちは、煙突が窓ガラスを抜け

て外へ通じている至極簡単なストーブをもっていました。皆がこのストーブをもっていたので私たちもそうしました。このストーブはよく暖めてくれましたが、薪が燃え尽きると、部屋もとたんに寒くなりました。しばらくすると、このストーブで何とかやっていけるようになりました。毎朝アイコさんがストーブに火をつけてくれました。

夫は薪を一人の木こりから買っていました。夫は、その木こりのところでお茶とイナゴ—それは醤油と砂糖で佃煮のように料理されていました—をご馳走になった、と話したことがありました。私は顔をしかめそうになりましたが、夫は「とても美味しかったよ。ただ、脚が歯の間に挟まった」と言いました。私もすべて試してみなくてはすみませんでした。イナゴは美味しかったのですが、甘い蜂の幼虫は好きではありませんでした。夫はなんでも食べました。発酵させた大豆の納豆も食べました。納豆は松本ではよく食べられていて、家から家へ売り歩く商人から買うことができました。豆腐も同じように買えました。晩には屋台でオデンが買えました。寒いときにオデンはとくに美味しかったです。私たちは和食をたくさん食べました。私は当時残念ながら和食を料理できませんでしたが、アイコさんが私たちのために作ってくれました。

私たちの浴室は冬には氷のように冷たくなりました。ですから、非常に熱いお湯で入浴するのですが、子どもたちを入れるのに40℃以上にはできませんし、38℃では寒くてふるえてしまいます。私たちの家には二人入れる木の浴槽がありましたので、夫はいつも子どもたちと入浴しました。最後にアイコさんが入りました。浴槽の外で身体を洗い、洗い流すので、浴槽のなかのお湯はあとから入っても澄んでいました。

最初のうちは無作法をしてしまったこともあります。それについてはもっと良く知っておくべきでした。松本で私たちは就任挨拶の訪問をしました。私たちはコートを着、マフラーを着けていましたが、長居するつもりはなかったの

それを取らず、お茶を1杯いただきながら座っていました。それはとても失礼なことでした。その後、お客さんが私たちのところに来たときに、彼らが入り口でコートを脱いで腕に書けたのを見て気がつきました。のちにドイツ語の先生方とそのことで笑ったものです。

強盗に襲われたこともありました。私が夜中に起きると、この凶々しい男は窓際を歩いていて、私は影を見ました。私が夫を揺り起こすと、彼は飛び起きて、泥棒がちょうど彼の前にいたので飛び掛って行きました。私の夫は1.86メートルあり、とても強かったということを思い浮かべてください。貧弱なその男はびっくりしてそこに座り込みました。しかし、いずれにせよ私たちの家に押し入ったというだけで十分に彼はあつかましかったわけで、夫は彼を学校の守衛のところへ連れて行こうとしました。彼は床に座り、許しを請いました。しかし、夫はそんなことは考えませんでした。雪が降っていて、泥棒は忍びこんだ窓の下に置いてきた下駄をほしがりました。でも夫は容赦しませんでした。夫は雪のなかを裸足で歩かせました。ですからいささか残酷でした。少なくとも彼の下駄を取ってこさせることもできたでしょう。彼らが学校に到着すると、守衛はすっかり驚いて、警察を呼びました。私の指輪と子ども部屋の机の上に置いてあった時計をその泥棒は自分のポケットに入れていました。夫の机からは札入れが盗られていました。夫は訪ねた神社で必ず御守を買う習慣があり、これをすべて、特別にそのためにもっていたひとつの札入れに入れていました。泥棒は、それがお金で膨らんでいると思ったのでしょうか。警察官がそれを開けて、御守しか入っていないのが分かると、警察官は笑わずにいられませんでした。

翌日、夫は何が書いてあるか興味津々で新聞を見ましたが、彼が泥棒を捕まえたというようなことは書かれてなく、守衛がいつも家の周囲を歩いて見張っていて、彼が泥棒を捕まえたと書いてありました。外国人には何も起こらなかった、と。夫は、生粋のプロイセン人でしたから、いきり立って「俺があい

つを捕まえたんだ。俺は臆病者ではない」と言いました。彼は26歳で、彼が闖入者を捕まえたことを誇りに思っていました。しかし、翌日校長が来て「ツァッヘルトさん、何のためにあなたは松本に来たのですか」と言いました。夫は「学生たちにここでドイツ語を教えるためです」と答えました。「そうですか。泥棒を捕まえるためではありませんよね。それはよろしくない仕事です」。普通は泥棒を捕まえたりしません。校長は私たちに、日本人は普通このような場合に備えて、万が一泥棒が入ったらくれてやるために枕の下に少しお金を入れておき、泥棒が他のものに手を出さないようにするのだ、と説明してくれました。夫は納得し、新聞では事実を隠して、守衛が泥棒を捕まえたことにしたということにも納得しました。

松本で8年過ごしたあと、1941年に私たちは横浜に移りました。それまでヴァルター・ドナート教授が東京のドイツ文化研究所の所長だったのですが、彼はドイツに行ってそのまま戻ってくることができなくなりました。戦争が始まったからです。そのためドイツ大使館の文化班は、私の夫に彼のポストを引き継ぎ、ドイツ人所長として文化会館に行ってくれと頼んできたのです。当時文化会館はまだ日比谷にありました。その後まもなく、素晴らしく美しい文化会館が三番町に建てられましたが、それものちに瓦礫になってしまいました。ここで私の夫は数年間実りの多い仕事をしました。

軽井沢の私たちをよく訪ねて来ていた若いドイツ人、ヘルムート・ヤンセンが、松本のポストに就き、夫が仕事を教え込みました。

1944年に軽井沢に疎開するまで、私たちの子どもたちは横浜で幼稚園と学校に通いました。横浜の学校は軽井沢で続けられました。先生たちも疎開したのです。軽井沢で息子は第2学年と第3学年に通いました。私たちの二人の子どもはさらに不運なことに小児麻痺にかかり、毎日治療を受けなければなりませんでした。私たちはそれでも、非常に優れたスイス人女性の治療体操トレー

ナーがそこで働いていたという幸運に恵まれました。クライン＝フォーゲルさんです。彼女が子どもたちを治療してくれました。病気をすぐに正しく診断した医師、シュテーデフェルト博士も軽井沢に診療所を開いていました。子どもたちは二人ともドイツで手術を受け、現在ではポリオのあとはほとんど分かりません。

横浜で私たちは他のドイツ人との付き合いを多くもちました。私たちは文字どおりそれを渴望していました。それまで田舎に住んで、西洋人との付き合いがなかったからです。もちろん、私たちは日本人を大切にしなかったというわけではありません。私たちは、東京では松本ほどは日本人と知り合いになりませんでした。

横浜にはドイツ人のクラブハウスがありました。そこではたいていのドイツ人と会いました。そこで私は数人の女友だちとよく麻雀をしました。子どもたちは学校に行っていましたから。そして、テニスをするのができたのも嬉しく思いました。テニスは、松本ではそれが許されなかったというわけではありませんが、学生たちとは一緒にしませんでした。プールもテニスコートもありましたが、夫は、教師の妻としておてんば娘のようにしゃぎまわるのはよくない、と言いました。松本ではスポーツも芝居やコンサートも無しで済まさなくてはならなかったのです。横浜ではそれを取り戻しました。

私はドイツ人の女性たちとの付き合いをたっぷり楽しみましたが、私の母が日本人で私はアーリア人ではなかったため、ちょっと辛いこともありました。最初は、劣等感を抱いたとは言いませんが、すこし疎外感を感じていました。だんだんにそんな思いはなくなりました。私は婦人会でも役立ちたいと思いましたが、日本人とのハーフだったために断われました。根本的には女性たちは、婦人会の女性も含めて、みんな私にとっては魅力的でした。

私は日本人の片親をもつ人々のために、可能なときには、好んで力を尽くしました。たとえば、ドイツ映画の上映会に、私はドイツ人の夫をもっていたた

めに入場を許されました。私たちの友人だった人々は入場を断わられていました。しかし、私は頑固でした。ドイツの文化映画であるということを論拠にして、説得することができました。彼らはしぶしぶ譲歩し、私はとても嬉しく思いました。

松本ではこのような問題はありませんでした。東京ではそれはとても深刻な問題でした。たいへん不快でした。しかし夫は党员ではなかったので、そんなことを超越していました。だから彼らは夫を文化会館に呼んだのだと思います。

私たちが松本からやって来たばかりのときに、夫は、ゾルゲとどんな関係があったかという質問を受ける破目になりました。夫は、ゾルゲとは彼が逮捕される前に一度会話を交わしただけだと断言することができました。良心の呵責を感じることなく、そう言うことができました。ゾルゲは文化会館に時々本を借りたり、レファレンスを受けるために来ていました。ドイツ通信社で働いていた私たちの友人の一人が、時々彼に日本に関する情報を渡していましたが、秘密事項とか何かではありませんでした。この友人はゾルゲから「良い協力関係のために」という献辞が書かれた本を受け取ったことがありました。しかし、彼はこのページをすぐに破り取ってしまいました。誤解を受けるかもしれないからです。本当に大波がうねっていたのです。

そうこうするうちに戦争がどんどん拡大していきました。日本人は西洋人を横浜に置いておくのを良しとしなくなりました。私たちはそれを理解しなければなりません。彼らは西洋人を、同盟国人であってもなくてもすぐには信用しませんでした。外国人たちは海を見渡すことができ、船の出入りを見ることができました。外国人はほとんど高台に家を構えていたのです。横浜ではこの地区は「Rising Sun Compound」と呼ばれていました。そこには美しい洋風の家があり、どの家からも海を見渡すことができました。日本人は、最終的

にドイツ人も含めてすべての外国人が軽井沢か宮ノ下へ疎開させられたことを喜びました。

私は夫を東京に残して子どもたちと一緒に軽井沢に行くことになりました。夫はあとから、文化会館が空襲で破壊されたときに軽井沢にやって来ました。それまで彼は東京で働いていました。多くの外国人が軽井沢に疎開していて、私たちはこの国際的な共同体のなかで、いつも気を配り、用心して口をきくように忠告されてはいましたが、とても安心できました。しかし、東京方面へ飛んで行く飛行機が見えました。飛行機の爆音が聞こえ、東京で何が起きるのが分かったときには恐ろしい気持ちになりました。

私たちは他の外国人たちから少し孤立していました。ドイツが降伏したあとでも変わりはありませんでした。その後、彼らは誇らしげで、話し掛けてはきませんでした。辛い終わりでした。自分たちの家のなかにいるとホッとしました。

東京で夫は別のドイツ人の家に住んでいました。その家には中国人の料理人がいて、個人的に肉の「配給」をしていました。あるとき、夫は帰宅すると、チャンが奥さんを殺したのではないかと思ったそうです。しかし、彼は浴室で豚を一頭解体したのです。浴室は血で一杯だったそうです。その代わり、夫は大きな肉の塊を分けてもらい、その週末に軽井沢にもってきました。その肉は、この中国人がこっそり売っていたものですから通常より高めでしたが、夫が焼肉用の肉をもって来てくれたのを私たちは喜びました。その肉は切り分けられ、ドイツ人の間で売られました。

食料の調達に関しては、ドイツ人は日本人に比べると良い方でした。私たちは、米や豆を日本人と同じだけ配給されましたが、その他にドイツ人コミュニティから追加の食料を受け取っていました。ドイツ人コミュニティは野菜や果物を田舎で買うことができると、それを分配しました。それに略奪品もあ

りました。ドイツ海軍は敵船を拿捕し、その積荷を奪いました。それが日本の近くでそういうことがあると、彼らは品物を日本にもって来ました。私たちはあとになってから、太平洋には非常に多くのドイツの補助巡洋艦と潜水艦がいたということを知りました。彼らは、自国の戦艦のために食料を運んでいた敵の補給船を撃沈していたのでしょう。コンビーフやハットやラードは大歓迎でした。こうして私たちのところには日本人より多くの食料があったのです。ドイツ人の食料事情は良く、飢えることはありませんでした。私たちはハット・ラードと味噌とコンビーフを混ぜ合わせて、レバーソーセージの代用品にしましたが、とても良い味でした。このような脂は日本人の手には入りませんでした。

生鮮食料品を買うために、私たちはコンビーフを日本人のところで現金化しました。軽井沢からは御代田と小諸という近くの町に行くことができたので、現金化はうまくいきました。そのお金で軽井沢の奥にあった農家でナッツやリンゴを手に入れました。交換する食料品が十分に無いときには服を売りました。不要になった夫の大きな服を農家にもって行くと、彼らはそれを小さくして利用できました。彼らは生地をもっていなかったので、夫の服はとても歓迎されました。

ドイツの様子はかろうじて知ることができました。ドイツの新聞は手に入りませんでした。文化会館にはいくらかあったかもしれませんが。私たちは東京から英字新聞を取り寄せていました。夫が軽井沢に移って来てからは何もありませんでした。ドイツとの接触は断たれていました。手紙も届きませんでした。1947年にルートヴィヒスブルクに到着して初めて、私たちは夫の母親に葉書を書くことができました。

大使館からの回状が戦争中もすべての高等学校の教員に送られてきました。それにはいつも、私たちは勝利する、と書かれていました。1945年5月5日まで。この日、ドイツ人コミュニティーの人々は全員カルイザワ・ホールに集

まるように言われました。そこで、ドイツは終わった、と伝えられました。男たちの多くは泣きました。私たちはそれでどうなるのか分かりませんでした。それからのことは不確かでした。家族がどんな目に遭うのか。ドイツに帰れるのか。アメリカが私たち全員を有刺鉄線のなかに閉じ込めるのか。

日本とドイツは同盟を結んでいましたが、日本人が私たちを信用していなかったのは明らかでした。とても厳しく、すべての日本人が恐れていた秘密警察がいつもうろついていました。とくにドイツが降伏してから日本が降伏するまでの間はそうでした。日本はまだ諦めていませんでしたから。私たちは、私たちをスパイとみなし、私たちを避ける日本人が少なくないと感じていました。もちろん良い友人たちも例外ではありませんでした。文化会館の井上氏は夫に「すべてを放り出して、家族のところへ行きなさい。何が起きるか分からないのですから」と忠告しました。

戦争中は家々の前に、空襲のときに逃げ込むための地下壕が掘られていました。しかし、それは私たちにはシンボルに過ぎないように思われました。私はそこへ入る勇気がありませんでした。外にいても同じでした。地下壕は板をかぶせただけだったのです。こういう地下壕を作るよう命令されていました。横浜では私たちは空襲を体験しませんでした。夫は東京で体験しました。彼は、終戦に近くなった頃、日本人はドイツ人とアメリカ人を区別できないから通りにいるのは危険だとも言っていました。

終戦間際には、男たちも軽井沢に留まりました。東京では多くのものが破壊され、麹町三番町の美しい文化会館も破壊されました。夫が軽井沢に来て、ドイツ大使館からお金をもらえなくなると、彼は日本人の女の子たちに英語を教えました。授業料は農産物や、彼らがもっていたものでした。夫はあまりきちんと授業料を取りませんでした。農産物は素晴らしく、米やキャベツなどでしたが、それらすでに貴重品になっていました。

私の夫は日本のあちこちを旅行して回りました。彼は仕事のために日本と日本人を知る必要がありました。彼は京都や東京のOAGに講演のために行くこともありました。私は、少なくとも彼がそうすることができたのを喜んでいました。しかし、私はまったく日本人の主婦と同じでした。私は子どもたちと家に残っていました。夫は戦後かなりしてから日本縦断の旅に私を連れ出し、ようやく私に九州や四国を個人的な解説付きで見せてくれました。この旅で私はできなかったことを取り戻しました。これがなかったなら、私は生涯悲しい思いをしたことでしょう。あれほど長く日本で暮らしたのに何も見なかったことになってしまうのですから。

私たちは日本にいた14年の間一度もドイツへは行きませんでした。費用が掛かり過ぎたのです。生活には充分なだけお金はありましたが、私たちは貯金しなければなりません。夫は戦争未亡人だった彼の母親と病気の兄にお金を送っていたのです。

私たちは、アメリカ軍による占領後軽井沢で一種の抑留生活を送るようになると、もはや旅行はできなくなりました。東京に行きたいときには、警察に行って証明書を発行してもらわなければなりません。アメリカのMPが駅に立っていて、すべてをチェックしていました。旅行ができたのは、重要な理由があるときだけでした。私たちは、小児麻痺の子どもたちのために東京へ行きました。マッカーサーと一緒にアメリカの名医が来ていると聞いたからです。私たちは、彼の診察を受ける許可をもらいました。それはアメリカ人の大きな好意でした。私たちは1946年8月に東京に行きました。ひどく暑かったのですが、私たちはそれを知りませんでした。夏の間私たちはいつも軽井沢にいたからです。

夫は100日間軽井沢で自宅拘留されていました。この時期にいつも一人のアメリカ人が、夫がちゃんと家にいるかどうか見に来ました。夫はおとなしく家にいたので、彼が監禁されているのかどうか分かりませんでした。おそらくそ

の理由は、彼が文化会館の館長だったということです。ドイツ大使館の文化班にいたナチ党員の何人かは巣鴨の東京拘置所に入れられました。

1947年の本国送還は強制的に行われました。対象になったのはすべてのドイツ人ではなく、古くから住みついていたドイツ人やユダヤ系ドイツ人は残ることを許されました。オスカー・ベンル¹⁶とホルスト・ハミツチュ¹⁷は私たちと同じ船に乗りました。ヴァルター・ハイシヒ¹⁸もいました。彼は上海で乗船してきましたが、他の数名と一緒に別の船室に入れられました。私たちは彼らと話すことを許されませんでした。

私は日本から本国へ送還される船上で具合が悪くなりました。3人目の子どもを身ごもっていたためで、この子はベルリンで生まれました。大変な苦労はしましたが、私たちは、家族と一緒にいることがき、健康でドイツに帰れることを喜んでいました。

最後に、私たちの家族にとって回想のなかの日本時代は幸福な時だったと言っておきたいと思います。私たちは直接の戦禍を免れましたし、1947年にドイツで再出発をすることができたのですから。ベルリンで長く厳しい年月を過ごしたのち、結局ボンとケルンが私の故郷になりました。そして、私はこの地でこうして元気に過ごしています¹⁹。

* 聞き取りは1994年11月10日と1995年1月29日にケルンで行われた。

16 1937年-1940年、日本に留学。のちにハンブルク大学日本学教授。

17 1933年-1941年、名古屋大学にドイツ語講師として勤務。のちにミュンヘン大学およびボーフム大学で日本学の教授。

18 詳しいデータはないが、のちにモンゴル学教授。

19 ツァッヘルト夫人は、2001年4月1日ボンの病院で老衰のため他界された。93歳だった。臨終の床は子供たち全員が見守り大往生だったそうである。